

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.328

昭和十二年七月一日第三種郵便物認可
昭和九年九月一日發行第九卷第九號
(毎月一回一日發行)

創刊大正十三年通卷・三百廿八号

麻生路郎☆主宰



mio.

九月號

川

柳

の

証



九月號目次

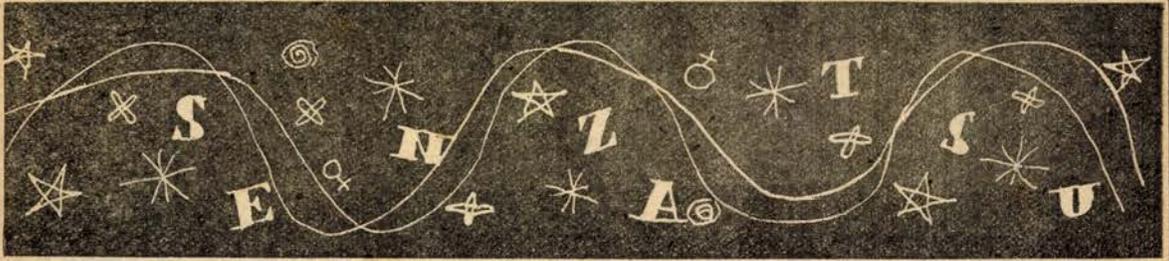
(昭和二十九年)

題字……………麻生路郎	ホーム雑談……………久保和友(三七)
表紙……………米田三男之介	飛燕往来……………(三六)
川柳まつり……………北川春集記(二〇)	
川柳滑稽文学論……………藤本満年(二六)	
時評 荷物……………麻生路郎(三)	
疎開 荷物……………麻生路郎(三)	
川柳第二教室……………戸田古方(二六)	
打水とドクトル……………安川久留美(二四)	
古川柳の現実への触れ方……………品川陣居(三)	
或る論評を巡って……………吉田水車(五)	
……………福田山雨楼(五)	
隻手雑記……………東野大八(九)	
万よしと川柳……………(四)	
天地人制は最短批評……………(八)	
不朽洞句帖……………麻生路郎(三)	
川柳塔……………麻生路郎選(四)	
同舟近詠……………諸家(二六)	
近作柳櫛……………麻生路郎選(四)	
……………北川春集選(四)	
一路集 「嫂」……………川村好郎選(四)	
……………「日給」……………国弘半休選(四)	
各地柳壇……………(九)	
不朽洞会から……………(五)	
柳界展望……………(三)	
公私雑記……………(五)	

曜土二第……………は忌柳川社本

時 日 九月十一日午後六時
 場 会 光明寺 大坂天王寺区下町二丁目市バス停前
 (車下停電三橋本日は又町寺下らな電市)
 兼 題 「恩」 「嵐」 「内案」
 柳 話 麻生路郎 句評 水谷鮎美
 柳川雜誌社句会部

らか『誌雜柳川』も義奥も門入



疎開荷物

一川柳忌を前にして

昭和十九年九月十五日、私たち一家は三重県へ疎開した。毎年九月が来るに疎開した頃の事が、脳裡でうずく。それは一つのあますっぱい懐しきでもある。陽光に輝くB29の雄姿？が、疎開荷物を運ぶ私たち親子のすぐ頭の上を東方を目ざして飛んで行つたこと、はじめて知つたジャガイモのあまき、タニシのすき焼、魚釣り、泥鰌捌い、柴拾い、百姓の真似ごと、何から何まで、すべては原始生活への逆行であつた。

疎開の決行についてはしゅんじゅんしなかつたが、そんな遠隔な地へどうして荷物を運ぶかと云うなやみはなかく大きかつた。大阪から三重県まで疎開荷物を運んで来れる

よらかなトラックはいなかつた。仮令運んで来れるとしても、彼等の申出る莫大な賃金と多量の白米の要求には、応じたくも応じられなかつたのである。遂に私は当時十六才の三男を対手に、私たちが、その白米を喰べることによつて、私たちの手で運ぶ決意をした。私は一台のリヤカーを手に入れ、焼失したら、もう二度と手に入れられそうもない書籍や家具を二回に運んだ。それは朝発つて三日目の午後二時でなければ、行きつかぬ距離ではあつたが、足にまかせて、大和川を目あてに王子へ出て、奈良県を北へ突きぬけ、京都府に出た。木津川沿いに木津、加茂、笠置、大河原、島ヶ原を経て伊賀の上野に出た。疎開地

はそれから東方一里の山の中腹であつた。とろ／＼断行して友人をあきらめさせたものである。私はこゝに生活の一時の？の根拠を見出し、四、五日分の食糧をリュックに入れて、セツセと大阪への芭蕉の旅をつづけたのであつた。私や三男が大阪へ戻つてからも妻は疎開地に残つた。その後、妻の疎開は三転四転して遂に奈良県宇陀郡に疎開荷物をあずけたまま終戦後四、五年して引揚げて来た。

(路郎)

不朽洞句帖

麻生路郎

天皇北海道へ(三句)

北の旅風の強さも身にしみん

あゝそう あゝそうと繰返えず旅の空

ホームラン祈る父あり母があり

持逃げの見おさめ熱海修善寺

図太さは首相頼杖ついたきり



貸浴衣同じ酒とは思われず

洋装も艶つぽくなく横坐り

引退をしたなど植木の数を見る

お隣が有福過ぎて家ともめ

米子市 三 鴨 美 笑

銀行が貸さぬか老舗でもつぶれ

金魚でもたまに欠伸もするものさ

東京都 藤 本 満 年

↓ 中元はなるべく箱を大きくし

↓ 下つ端を犬死させて汚職済み

ボケツトにすしり銅貨を持て餘し

ノノタイで来て冷房でくしやみをし

年寄りと見られまいとの早や足か

ニコ／＼として交通怒りやはり

↓ デモ隊よたまに失業おもえかし

鳥取市 大 西 八 歩

屋台店女さわれれそうに酌ぎ

借家住いせめて花でも植えましよう

棒引きと云う手もあつて生きて行き

山越えて足も流れも軽くなり

大阪市 須 崎 豆 秋

うそ寒き告別式の道しるべ

不景気で困りますよと葬式屋

ミツマメを食べてわかれるだけの恋

大阪市 正 本 水 客

大阪の情緒とやらへバス並ぶ

盃を両手で受ける馬鹿らしさ

拾円のおつり暫く待たしとき

腕時計おんなは時間気にしてす

里帰りしない女房にいつかなり

胡瓜さぎむにも楽しさとわびしさと

何の事か分らぬ札を又云われ

天才ちやなかるうかなど思うて見

水道の横から蟹が顔を出し

池田市 黒 川 紫 香

長椅子へ暇あり過ぎる身をあすけ

托兒所の晝寝きれいな陽があたり

煙管スパ／＼稲の風をば見てるなり

追憶のなかにも憎い／＼ひと

抱擁の腕からのぞく電子環

酒強いとこが買われた役に就き

錦着て帰る故郷の駅小し

家庭教師恋の手引もしてくれる

寺の晝野球放送派手に鳴り

退職後記憶の悪い人になり

大和 高田市 尾 崎 方 正

その道に入れば音楽苦しそう

観劇へにきび一つで取り消す娘

乱闘と彌次の国ですジャズのやう

菊さして秋けんらんの夢を抱く

盆裁の話をすればからかわれ

しようもない花だが少し根を残し

池田市 戸 田 古 方

一旦緩急あれば「義勇公」といわぬだけ

死に水をとつてくれたは飲仲間

徹夜してまで面子を面子を

▽ パリーしか知らない人もいるパリー

モンバルナスの壁のよごとと似たよごと

おごつて見たいまだそんなこと考えて

ナイターを見て大阪を發つと決め

へつちやらの手品のタネをたんと持ち

大阪市 市場 没 食 子

婦人科へ四十を過ぎて気がとがめ

子供等はナイフホークで喰べたがり

長男が満十八で分けた髪

三度目は禿げた旦那でまだつゞき

横浜市 福 田 山 雨 楼

ピケライン昔の戦思わせる

念佛だ禪だ勝手な熱をあげ

狭い庭紅一点のダリヤ咲く

クラシック音楽がしみ込むあばら骨

ホノルム市内 藤 草 一 郎

人一人雇つて資本家のつもり



花持つて出れば女の感嘆詞
老境のつもりではなし花が好き

大阪市 菊沢小松園

雨漏りを妻に任せて嫁ぎに出

天王寺斯くなり果てた莫薩に座し

どしや降りて掛取さえもやつて来ず

父親が勝手に決めた母が来る

復古調詩吟末席から聞え

大阪市 武部香林

欠伸して子の散髪を待つてやり

牛乳でよいとはおごられる身の

争議團二号の家もとりかこみ

箒の音ばかり聞えて女住み

債権者会議小口がよく喋り

足らぬとこだけ奥さんが口を入れ

愛情は洗濯の白さでも判り

大阪市 木下幽王

向いのおつきさんもバタ／＼の音に腹を立て

あの時は別れる気でしたとしやあ／＼と

旅で見れ火事も土産の一つにし

せつきなんて不感性になつてあきんど

群集心理とは恐ろしき夏祭

二三軒呑屋たをして御栄轉

出雲市 尼 緑之助

尊徳をたゝえてさみし夜の酒

噴水をバツクに撒つた老夫婦

送別会型の如くに酔いつぶれ

大阪市 水谷竹花

人知らぬ恋あればこそまだ老いず
ハガキではいや文でだしてと言うてくる

下関市 弘津柳慶

犬までが主人の短気へちごこまり

長々とへちまは屋根に横たわり

鳥取市 杉谷湖山

釣竿が並び流れも静かなり

ネックレス模造真珠でたりる顔

怪談へ魔物の如く星が消ゆ

八代市 佐野ト占

大臣はいゝな取り得掴み得

悪政の批判は法で取締り

兵庫県 小西無鬼

点眼へ眼は口程に開かぬなり

小鳥熱鷲街に鳴く辛さ

堺市 吉田斜水

その日／＼が子供の日なりおらが家

課長席のぞけば切抜貼つて居り

放射能の何カウントかを傘で受け

吹田市 野本吞水

出来の好い妹姉に邪魔がられ

婿を待つ家なり戸樋もかけ替えて

尼崎市 小林文月

乗りがえて乗りがえて歩き会葬し

墓地なるが故に蔽のよく繁り

任おえし僧俗人の歩きかた

大阪市 渡辺孫拙

防潮の盲天ついて川あふれ
納得のいかぬ財布のひもをしめ

大阪市 富岡淡舟

屑の子もあるのに母の手内職

忠告をした方が情落してしま

奈良県 飯降白香

虚勢する事にもなれて女生き

執拗なこれでもいぢめたりないの

奈良県 西辻竹青

クビキリへ私情の涙限りなく

せめて夕食位は共に食べたいわ

一本の手紙も書かず春はゆき

無理もない吾が二十五の時惚ぶ

宇部市 長野井蛙

牛を飼う隣へかさかす蠅叩き

銀行がマツチもくれていゝ得意

布施市 森下愛論

まゝ母へあまえきれない声を出し

千代紙に少女の感傷たゞよわせ

二号三号丹那小まめによく通い

岡山県 丸山弓削平

活花の枝とは知らず糞虫の

鶴三の挿絵の様にサクラ佇ち

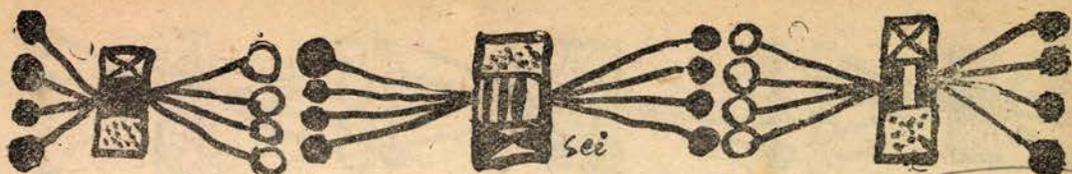
竹の皮許りに見える肉を買

折れようと思ふ矢先に妻が折れ

マレンコフ、アイクの地球には非ず

魚屋が愚痴り／＼食うマダロ

パチンコへ田植の済んだ顔で来る



去るものは追わず遂々失恋し
 薬ぐるを小ターザンにわやにされ

愛生園慰問

哀しみを砂に書くにも指はなし

岡山県 直原七面山

二号の子一号の子を泣して来

おぢやんと呼ぶ娘を恋うて今日も暮れ

去るものは追わず遂々失恋し

大阪市 西森 花村

大阪の廣さ失業してわかり

内職の場所を愛えてる雨のもり

鳥取市 河村 日満

早乙女となり孝子を二日する

下女の如働く妻が物足らず

宿毛市 姫田 夕鐘

金貸せと言えば仲居の笑うのみ

へっぴりばい明日のことなど考えず

へっぴりばい鼻の低さをどうする気

岡山県 福島 鉄 兒

もつたいないわと妓呑んでくれ

つめられるスリルも酒の肴にし

箸持つて喰べる倅せふと思ひ

吹殻の紅から思ひ出すこと

大阪市 谷 内 一 草

子供連れ二号持つてる顔でなし

代筆へまだ云い足らぬ顔を寄せ

岡山県 服部 十九平

橋の下に住む人間が犬を飼ひ

先生のヒスヘチヨークが又折れる

利廻りが良いと云うのでつい釣られ

岡山県 大森 娛 句 樂

失業の立場労組が憎うなり

夕立を口実にして迎えに来

誰か来たらしい團扇がある座敷

泥濘がさも怖そうな足運び

尾崎市 長谷川 三司

芸名をつぎ／＼替えてドサヘ落ち

警察の隠語も出前おぼえて来

兵庫県 若 林 草 右

拾屋へボールをたのむ裏野球

大阪市 足 立 春 雄

運命に逆う丈の意慾なく

蚊の野郎たゞけぬ所を知つて居る

熊本県 有 働 芳 仙

新聞を読む暇もない儲けよう

夕刊をこゝで受取る夕涼み

大阪市 浜 畑 胡 蝶

主婦としてしつこい程の値切りよう

妬く事の知らない妻で哀れなり

郷土奄美大島の復帰成る

まのあたり見るは蘇鉄の赤い実よ

下関市 石川 侃 流 洞

ボロクソに云われる親をなつかしみ

へちま風街の西陽をよけて住み

新党へ連なる骨董趣味の顔

広島県 山 田 季 贊

勝気なを認められたか昇給した

朝寝したのへ踏切までがじやまをする

大阪市 山 本 葉 光

惚れてから皆ライバルに見えて来る

身の上を訊いて貰つて酌ぎこぼし

可憐な言葉でハツキリことわられ

倉敷市 木 村 千 容

アルバムのこゝも一枚剝がれとり

元主計徴発の味忘れかね

ちやつかりやなのに賣喰いなど云い

封建の色がたゞよう事務机

俺に似てたおれた箒たてもせず

子供靴もすこし我慢させとこう

倉敷市 田 垣 方 大

お二階を二号に貸した金づまり

ネクタイを女社長に直される

職業を当てる仲居を敬遠し

背水の陣本妻も撥を持ち

銭にならぬ学部を長男希望する

有難い法話と團扇で聞き流し

誕生の日から親馬鹿笑われる

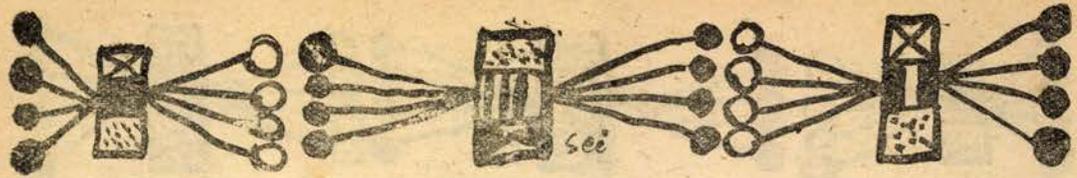
パチパチと扇子が鳴つて長話

御近所のみしみで貸した金なのに

石女の妻はパチンコ好きと云う

大阪市 木 村 水 堂

子を叱る声が大坂弁になり



花柳は明治の形で泣きくすれ

養子の悪口へ母娘の気がそろう
言い分は養子の方がたと持ち

初恋にしては上手にするキツス
サーピスもせずにやきもちだけはやき

ヒロボンと聞いただけでも寒うなり
神官にキツスの現場押えられ

老嬢のお相手をしてくだぶれる
失業の飲み／＼妻の首尾を待ち

妻子ある方なら世話なると云う
晴耕雨読あれば養子だ羨むな

金魚買う金がまだある未亡人
開拓村レコードを賣る店も出来

ぼんくらだが夏川イヅム可しとせず
終戦九月を迎え

ボン中の増殖までもしてくれた
倉敷市 梶原一善

お妾と一緒に猫も首になり
たくましく土工になつて後家を立て

本気で口説けば女はだまりぬ
岡山県 岡田夜潮

欣然とエレベータに足を入れ
女湯のボクを受取るひな男

三代目男だてらに眉を描き
一つ汽車視線もくれず降りて行き

岡山県 政田大介

ほんとうに惚れられそうになつて逃げ
余技に長じ医業ひまらしい

古橋の卵が溝を濁しどり
T B の寝汗ですよと妻威し

美味そうに見舞が飯を食つて去に
岡山県 本田恵二朗

投げやりを習いたい程きちようめん
たゞ褒めておくのを護身術ときめ

恋というしんどいものにつきあたり
大阪府 眞鍋一瓢

老妓まだ色気があつて取持てず
因果とは裸で踊る子に育ち

君が代も元はドレミファソで習い
その妹矢張り女給を志望する

屈託もなく食つて来た汲取屋
京都市 松川杜的

借りて居る人にも逢つた晝の風呂
シャツターを金魚に合わせし日曜日

放浪の風の便りは母が病み
人間は結局孤独みな嫁ぎ

宝塚きれいな夢を話し合
宝塚もう帰ろうと親が言い

裏町の晝は屋台がわびしいよ
倉吉市 日置文郷

ふるさとは汽車のけむりも美しい

俗人の俗人らしく生きるのみ
我もまた凡俗恋に流される

子供連れ途切れ途切れの唄で行き
代筆の祕書又嘘を書かされて

新聞も矢張り儲かる様に書き
注文の客とひと目で分る朝

嫁取つてぶら／＼してる置屋の子
心臓さえあれば社長にすぐに成れ

賤業婦ならビニールを着るもよからん
帯固く締めなを息子うるさがり

雷へ父も腹巻ささせられる
誕生の鯛がだん／＼小そうなり

子の花父も一緒に叱られる
おべんちやら猫の顔までほめてゆき

家出の娘ヅカの空気がすうてくる
宝塚歩けば妻が老けて見え

噂気にするなど女將抜け目なし
改悪へ孤立出来ずに巻き込まれ

お通夜だよ釣の話は止しときな
小児科の玩具をそれ程もてせす

そつちもちならば行こうと生ビール
下ア閉めてから女祕書舌を出し

大阪府 岩島雄歩

大阪府 後藤梅志



大阪市 木口賀峰

各停に乗れば各停の乗心地

家へ帰れば大阪弁になる社長

西大寺市 三枝一策

路次裏に育つた顔と思われず

かと云うて機嫌を取れば尙ひすり

岡山県 岡本緑風子

別嬪を押して車掌に睨まれた

迷いから覚めた涙が膝へ落ち

ソファアヘート息入れて下女は掃き

慰問する身の倅をふと感じ

惚れられているなと思うのは自由

痛快な男で借金気にとめず

髻さんが配給米を取りに来る

岡山市 津田麦太楼

大阪府 森文夫

浮浪児の寝顔にあつた佛さま

今日は叱るつもり息子の際際費

糟糠の妻の達者を持てあまし

ビールならかまいませんかと退院日

運命は儲かる時を蓄めそびれ

今年流行と言う水着へそが見え

Y談に笑い轉けとるPTA

大阪府 吾郷玲人

せめてもの紅の胴着に尼若し

大阪へ星が落ちたよバンガロー

浅貧に居て町史など編纂し

酒の害倅が解けば理論めき

マリソンのお臀をチクと食べた蚤

岡山県 岡田青果

昨日まで茶漬を食べた幸運児

恋人が来て珍客が邪魔がられ

口止めをジュースで頼むテンエージャ

かつぎ屋をやめてもかつぎ屋と言われ

真心を男は酒で信じ合い

大阪府 若本多久志

岡山県 浜野奇童

サンガラス沖のカモメを見つめてる

何となく父親が好き女の子

若い血は燃えるし家には妻や子が

ふと気付く重役タイプへ自己嫌悪

のゝしつた社会へする溶かされる

もう二号出来ましたかと凡愚なり

堺市 高崎雄声

岡山県 藤井明朗

寝ることも仕事となつたストライキ

岡目八目助言したくなり

保守党を支持する程に金が出来

新婚はワイシャツに匂い匂い匂い

帽子の型で女と判る程に老け

ミス一位だつたに子運恵まれず

岡山県 永松東岸子

時どきは妻も内緒で借られとり

取りに来たように百円借りに来る

借りる方は千円程と軽う言い

妻を叱れば子供までだまり

他人の浮気がだまつては居れず

こしらえた笑顔とわかる味気なさ

兵庫県 小島無聖

今日こそと力めばあの娘休みです

何の音も止つた夜半生命を思う

忍術のような手つきで壽司が出来

倉敷市 野田素身郎

新課長猥談好きで親しまれ

ひまつぶしする気議論を長びかせ

御機嫌が斜決裁判いがみ

倉敷市 安原斜木

洋装のチト不似合のお茶の席

滞納を自慢する程の腹が出来

OSK

毛織物 既製服 製造卸商

株式会社 大坂商店

大阪市東区糸屋町一丁目二

電話東④一七四五番



隻手雑記

— 寂しさは手のない袖に風が吹く —

東野 大八

手袋とか、足袋とかいっつたものは、落しても捨つても片方だけの場合は多いものである。こうした品物は、二つ揃つていてこそはじめて役に立つので、どちらが無くなつても一つだけでは意味がない。そこで私は「手袋を片つぽ落して困っている方はご相談下さい」と社員に呼びかけた。すると二つの軍手と一つの皮手袋が集つた。私はその一つを上機嫌で片手にはめながら「おれには一つだけあれば一人前だよ」といつたら成程、と持つてきた相手は感心した。この感心の仕方の中に、献じる側の方でもある種の満足感ともなつていゝことは、まことにご同慶の至りである。皮手袋は幸い右手用で、しかも社の重役氏がくれた。それだけに電車などでこれがつり革をにぎつていゝと、われながら至極みち足りた気になる。モノがいゝというところは、確率の高い風采賞場である。勤労用にあつては軍手は、洗濯さえすれば、どちらの掌でも順応する融通性を持つて

つていゝから有難い。

ところで某日、そんな軍手をくれたなかの一人が、しおつばい顔で私の傍らにきて言った。「うちで私の傍らにきて言った。『うち

の女房に、貴方に手袋をあげて喜ばれた話をしたら、ボンと彼女小膝をたゝいて、ねえ下駄箱のあれをあなたにあげましようか、という。明るいその顔についてこつちも調子がついてしまつて、うん、よからう、と思わず返事をしてしまつた。私の上を歩きの下駄で、正目が通つた桐の一枚函ですが、うちの犬が片つぽをどこかえ持つていつちまつた。あんまり新しいのでつい勿体なくて藏つておいたという次第。ところがその片つぽの下駄をぶら下げていつた相手は、貴方と同じ傷夷軍人で、松葉杖をついた右太たい部切斷です」こゝまで大きく私は笑い出してしまつた。片つぽの下駄にソツポを向いたその人の姿が眼に見えるようだからだ。「テのない話に足が出ましたね」

私はそういつて、この好人物の相手の顔を眺めて、いつまでも微笑してゐた。

— 妻の出す両腕あつたころの服

二階の私の部屋に、この短冊が下つていゝ。亡くなつた川崎百桶君で、煤けて、ひどく古ぼけていゝ。私と同じ傷病兵だが、彼は内部疾患で、久しく肺患に悩んでいゝ。四国の松山の国立療養所に入つていゝ、この百桶君をはじめ看護婦さんらも加つた、晴窓川柳句会といふものを作つてゐた。元氣な頃は、仲間二、三人とよく県内の各句会にも出席、繊細だが鋭い佳句を発表して並居るものを感じさせたものである。前田伍健さんと同行して、彼の病院に慰問句会に出かけたこともあるが、戦場で同じ白衣を着たといつた共通なもの、私たちの友情を温めてゐた。

ことにタフに振舞える。この点私は五体満足に揃つていても、胸の方は破れ提灯みたいにたがたです。時は曾えらんですすよ、自分の若さが勿体なくて……」と百桶君がいつたことがある。「成程そらういゝこともあるでしょう。しかしあなたが言うように、私の内臓は別に頑健でもありませんよ、胸全体に油断のならない病気がとりつゝいてゐる。それは精神傷夷病という奴。早くいゝばヒガミつていゝ代物ですか。誠に複雑微妙な病人ですよ、その点あなたは単一病状だから集中治療がきく」

私のこの言葉に、百桶君はニツコリして

「健全な肉体にこそ健康な精神が宿る、つてことは真理ですな。人間つて案外つまらん動物です」それで二人の話はとぎれたが、彼はそれつぎ私の前に現れなかつた。

洛陽攻畧が終つた十九年夏、私たちの部隊は、黄河畔の一部落に二カ月もブラブラ待機してゐた。勤務といふのは、二週間に一度廻つてくる衛兵勤務だけ。あとは学課一つ教練一つあるわけがなく、勿体なくもめしを食つては風寝ばかりしてゐた。そんな生活にも飽きてどうしようもなくなつたころ、部隊についてきた苦力の一人が、或日私を呼びにきた。「天好メシメンでな」とハリ切つてゐる。出かける所要領のいゝ現地召集兵のNという上等兵が、いゝ機嫌でバイ酒に酔つぱらつてゐる。傍では呼びにきた苦力をはじめ数人のニヤ共が、ジュージュー何かの天ぶらをあげてゐる。「此奴は豪勢だ」と私は忽ち相ごうを崩して早速一座に加つた。ところが座について小一時間もせぬうち、私は猛烈な腹痛に襲われ、尾ろくな話だが、上げる下すの態たらくとなつてつゝいに頭も上らなくなつた。後で判つたことだが、この原因は、苦力の揚げていた天ぶらに當つた。つまりこの天ぶら油は、カラ傘製造等に用ゐる桐油だつたというわけ。苦力数人と私は、かくて数日間断食の苦行に入つた。Nは酒一辺倒で、一切も口にしなかつたのでビンビンしてゐたが、さすが責任を感じてゐたのか、いろいろ介抱してくれた。眼はくぼみ、瘦せ衰へた私に、某日Nがいつものようにやつてきて「いよいよお別れだ」といゝ。話によると部隊は沖繩に転進する。しかし年寄や病兵は残留して他部隊に配属させられるといゝ。フーン、私はいつたきりだつたが、今思えば、私の運命はこのとき大きな転換をすでに示してゐたのだ。なぜなら沖繩に転進した私の部隊は、つゝいにそこで御承知の通りの悲惨な玉碎を遂げた。石部隊といゝのがそれである。

健康な精神を失つた不健全な肉体に、時には運命の大吉運もまた宿るものとみえる。百桶君にこの話を一度きかせておきたかつた、と時折私は考えたりしてゐる。



長事理庵々生と(左) 郎郎路・楯勝優

栄冠耀やく楯を目指して競吟

川柳まつり

— 柳味みなぎる殿堂に —

やめてほしい酒をつぎ」とを焼き付けた二枚の大型「川柳せんべい」であった。

昭和二十九年七月十日午後五時から川柳雑誌社並びに大阪府市各支部総合の第一回川柳川柳まつりが天王寺区下寺町大覚寺に於て、賑々しく挙行された。

川柳行燈の下に

定刻前、詰めかける参会者で玄関受付は大混雑であった。受付氏は、参会者に土産を渡したり、此の日のために用意された路郎先生揮毫の川柳手拭を渡したり、又出席者の胸に雅号を書いた札を針で留めたりせねばならぬのでてんとこ舞の形。お土産は何か、とそつと開いて見ると、路郎先生の名句「俺に似上俺に似るなと子を思ひ」と、蔑乃夫人の「飲んでほし

おつさん理事の名刺くれ・栗」「社長以下いまだに屋はうどんなり・没食子」「大雨警報橋が流れてしもてから・豆秋」「泥棒の逃げた窓から首を出し・小松園」

会場の真正面には今夜の行事の順序や、兼題・選者名を書いた大きな紙ピラが吊り下げられ、硝子戸を開放された後の庭から来る涼風に揺れている。バツと明るいので、フト見上げると、天井の電燈以外に欄間から螢光燈が輝いている。又会場右側の高い所には十個の川柳行燈が並んでいて、理事長中島生々庵氏の筆になる次の句と戸田古方氏筆のその句にふさわしい絵とが夫々書かれており、中には灯が入っている。

「出来るなら坐りたくない麻の服・生々庵」「スタイルは満点海はつかるだけ・文蝶」「日雇のみんな背中を見せて飯・鮎美」「暴君は音のしそうなものを投げ・白柳子」「颱風も裏から来る手知つたらし・香林」「屑買いも一緒にのぞく椽の下・春菓」「牛肉屋の

おつさん理事の名刺くれ・栗」「社長以下いまだに屋はうどんなり・没食子」「大雨警報橋が流れてしもてから・豆秋」「泥棒の逃げた窓から首を出し・小松園」

今日は生憎と朝からの雨で、出席者も減りはせぬかと氣遣われたが、午後からは雨も上り、空が曇つていけるせいか却つて涼しいので、会場は人で埋つていても、暑さが余り苦にならぬのは有難かつた。

優勝楯に驚異の瞳

外が暗くなるにつれて、螢光燈や行燈の灯は益々光を増して、正面の机の上に並べられた優勝楯と優賞カップとを照らし出していている。今夜は席題がないので、参会者は互いに隣の人と話し合つたり、遠くにいる人と目礼を交したり、会場には和やかな空氣が漂う。会場のスナップ写真を撮るために、時々閃くフラッシュが会の

雰囲気を高めるのに役立つ。

やがて六時半、司会者戸田古方氏によつて開会が宣せられ、特別課題「誕生」をはじめ、兼題「伴」（路郎先生選）、「ベンガロー」（生々庵選）、「毒味」（緑雨選）、「湯上り」（没食子選）がメ切られた。

特別課題の「誕生」は、全国各地から集つた句と共に、後日路郎先生が選をされて、「川柳雑誌」上に発表されることになつており、その優勝者には路郎賞を、優勝者所属の会へは、現在机の上に見られる優勝楯が贈られることになつていのだ。今夜、路郎先生選の兼題「伴」の天位には、不朽洞賞のカップが贈られることは例会と同じである。果して誰が優勝を誇り得るであらうか！

集句が終ると、不朽洞会副理事長・武部香林氏が百数十名を前にして次ぎのような挨拶を述べられた。

「そも／＼川柳は徳川時代の封建制度下に民衆の間に芽生えたものであるが、彼らは『これ小判たつた一晩いくれろ』の句を吐いて、経済的には決してらくではなかつた。先生は終戦直後に『餓死線へまだ一丁はあるならん』の句を作つて、悠々と川柳されている。現在国民は苦しんでいるのに国会は大混乱、大乱斗を演じ、民主的でもなく川柳的でもない。先生は『春の草代議士などに踏まれるな』『芋蔓のどれも腐つた芋ばかり』と諷刺されて、川柳生活者のよきを見せていられる。近頃は『ヒロポン文化』と云う言葉がある。これはパチンコ、ダンスホール、温泉マークの安宿など、ヒロポン注射と同じく、一時的興奮を喜ぶ姿である。つまり分裂症的の文化で、ローマ文化にも似ているが、ローマ文化は頽廢的だったのに引きかえ、今日の日本文化は敗戦的である。我々は此の世情を、川柳によつて批判せんとするもので、たとえ身には鞭を纏いながらも心は珠を磨きたいと思ふ。先生は五十年の長きに亘り、『生命ある句を残せ』と叫ばれて、川柳生活をされているのであるが、今回先生の御誕生日を、『川柳川柳まつり』と定め、年行事の第一回として、今夜こゝに行つたことになつた。主唱者の中島生々庵氏に対して敬意を表するものである。」

次に横浜市に於て斗病中の川柳



川柳行燈下に集つた大阪府部の川柳雑川のつまつり況実

雑誌社副主幹・福田山雨
様氏からの祝辞を、不朽
洞会副理事長・西尾葉氏
が代読された。

「本日、七月十日を期
して全国一斉にわが川柳
雑誌社、支部、並びに川
柳雑誌社系団体が第一回
の川柳まつりを開催する
こととなり、大阪方面を
統合する本社の川柳まつ
りも茲に盛大なる脚光を
浴びて取行われますこと
は、われら川柳人として

近來にない喜びでありま
して、現下川柳界の盛事
をさながらに表わすもの
として、誠に欣快に堪え
ないところであります。

抑々国家社会に於ける
祭典の歴史はつとに古
く、社会状態の進歩発展
に伴つて益々その色彩を
加え、スポーツの祭典た
る世界的オリンピックを
始め、芸術祭、学園祭、
カーニバル、更には全国
津々浦々に於ける神社の
祭礼等、その種類、規模
は年と共に広まっております
のであります。祭の志
すところのものは一言に
申しますならば、人間生
活の安寧幸福の増進を念
願するものであります。
祭の意義は極めて深く、
且つ大なりと云わねばな

りません。

われわれの愛好して止まない川
柳文学の目ざすところのものは、
これを一言にして申しますなら
ば、広い意味のおかしみの情操を
豊かにする人間陶冶の詩にあるの
であります。この大衆詩社会詩
が年に一度の祭典を持つことは極
めて自然であり、川柳の前途をた
ゞえるにふさわしい行事でありま
す。この画期的な記念すべき川柳
まつりを契機として、今後川柳界
は一段と進展することを確信致し
ます。

茲に満場各位の御健康を祝し、
併せて全国各地に於て開催の川柳
まつりに参加せられたる川柳人各
位の御幸福をお祈りして、甚だ簡
単ではありますがお祝いの言葉と
致す次第であります。」

川柳まつりに就て

ついで不朽洞会理事長・中島生
々庵氏の「川柳まつりに就い
て」と題する講演があつた。氏は
「路郎先生門下生を代表して、一
言御挨拶申し上げます。」と前置き
して、川柳まつりの趣旨並びに川
柳まつりの将来に対する希望を次
の如く述べられた。

「今日七月十日は先生の御誕生
日である。先生は、若鮎のよう
にと云つても誇張でない程新鮮で活
動的で、然もロマンチックでピチ
／＼としておられる。そして蔑乃
夫人をはじめ御一家は、益々御健
祥、御繁栄の一途であつて、先ず

先生の御一家に対し心からお喜び
を申上げる。

さて先生の川柳生活五十周年を
記念した色々の行事は、昨年末に
句集『旅人』の刊行を以て一先ず
終つた形であるが、はじめに発表
した企劃の中には不朽洞書音を先
生に差上げることが掲げられてあ
つた。これは先生のため、少し
でも憩いの場所ともなり、思索の
場ともなつて、先生のペンの走り
が滑らかに筆の運びが力強くなる
ようにとの、私達のささやかな念
願で、是非実現したいと努力して
いたのであるが、御謙虚な先生の
御性質から、皆にこれ以上の負担
をかけたくないとの固い御決意を
申し渡されたので、止むを得ず不
本意ながら一時中止して静観する
ことになつたのである。決して取
消したのではない。従つて今夕の
この「川柳まつり」は、不朽洞書
音建設の代りに行われるのではな
く、全く別個に、相当以前から常
任理事会で練られていたものでは
ある。今夕、「第一回川柳まつり」
がかくも賑々しく催されたこと
は、世話人としてこれに勝る喜び
はなく、皆様の御協力を感謝する
次第である。

北は北海道から南は九州の端ま
で、遠くは太平洋の彼方ハワイに
至る、先生の血が通い脈搏が鼓動
している各支部及び川柳関係者が
本社を中心として、場所こそ距て
／＼おれ、先生のお肌の温みをほの
／＼と身近に感じながら、毎年同

じ日の同じ時刻に、そして同じ課
題の下に作句に精進すると云うこ
とは、考えただけでも、何とも云
えぬ心あたゝまるものがあるでは
ないか!

此の昭和二十九年七月十日の、
第一回川柳まつりこそは、将来、
川柳雑誌社は勿論のこと、全国川
柳界の歴史上一大エポックを劃す
る出来事であることを、私は確信
して申上げる。

想を練り技を修めるために、色
々の形の句会を持つことは勿論必
要であるが、我が川柳雑誌社以
前から、少々毛色が違つていろと
云われていた。その違つていろと
並の毛色のものが、先生の御作の
『古くとも僕は仁義礼智信』、
これであると、私は思つている。

そして先生の此の純一なお気持ち
に対して、私達後進のものがお応え
したのが、寿像捧呈であり、句集
刊行であり、又本夕の『川柳まつ
り』の発足である。川柳まつり
は、年一年、年を重ねる毎に盛大
になり、行く／＼はポウバイとし
て、五月一日のメーデーの如く、
或は十二月二十四日のクリスマス
イブの如く、拡がり深まつて行
くことは、火を見るよりも明か
である。このような意味で、今後の
川柳まつりの運営は、先生のお言
葉にもあるように、浴衣がけ、ノ
イタイで、より朝かにより愉快
に、一夕を持ちたいものと思ふ。
そうして、川柳人の『いのち』あ
る生活を高らかに歌いつづけよう

路郎師は語る

「今夜はかくも多数に集つて下さつて有難い。今迄は私のことを褒められてばかりで、今こゝへ出るのが恥しい位である。私はそれ程純情なのである。私はこゝにい

で、皆さんのお顔を見るだけで愉快だ。顔が見られなければ通信をすればよいのだが、そのために名簿を作っているけれども、その名簿の整理は仲々むづかしい。別荘を作つてそちらに転居した、と云うのは連絡して来るが、商売がうまく行かず夜逃げしたのは何も云うて来ない。どうか一つの所で安定した生活を續けてほしい。川柳生活も亦そのようであつてほしい。句会へ二、三回出て、或は雑誌でよく抜けて、仲々有望な作家だと思つていたのが、いつの間にか消えてしまふのは、親類が零落したような気がして淋しい。久しぶりに句会へ出て来られた人達に会ふのも、実に楽しいものだ。

最近私は病氣をした。これは極度の睡眠不足と疲労とから来ているもので、それ程私は川柳のために尽くしている。が、然し決して悩みなどは持つていない。川柳をやつては、商売とも関係はない。適当な栄養を摂つて体を

ではないか！」

保つこと位は、デフレ下に於ても大してむづかしくはない。然し人間の生きることは、いつの世にもむづかしい。私はかつて代議士に立候補して落ちたが、出ていなくてよかつたと思ふ。若し出ていたら。此の間の乱斗の時は殴られていただろう。或は少し位は殴り返したかも知れぬが殴られた方が多かつたであらう。

今日は私の誕生日で、毎年レンコ鯛位のお祝は家でしてくれのだが、今日は皆が祝つてやると云われるので有難い。先日家内が、十日には家で祝えないから「繰り上げ」ましよう、と云つた。「いつにするのんや」と云うなら、「十一日」にしよう、と云う。「十一日にするのやつたら繰り上げるのやないか。」と云つたら、「数が上になるので繰り上げや」と云う。家ではいつもこんな漫才みたいなことばかりやつている。

こゝ迄は先生、例の調子で原稿もなく話されたが、こゝで初めてポケットから原稿を取り出されたのである。柳話は續く……

「最近某新聞社の記者がやつて来て、隨筆を月に三編書いてくれと云つたが原稿料は安い。私は曜日で仕事をしたいので、第一第三月曜日に、月二回書くことにして早速第一回を書いたのが此の原稿である。『マ』と云うことに就いては、以前にも話したことがあるが、又違った方面から今度も『マ』に就いて書いて見た。新聞の原稿をこゝで話すのは、同じ商品を二ヶ所で売ることになるが、

原稿料が安いのでから了承して貰いたい。尤もこんなことははじめである。

音楽でも踊りでも『マ』が大切である。のべつまくなしにやつたら、きり／＼舞になる。我々の住む長屋でも、金持の家同様に前栽がある。これが家の『マ』である。家へ入るなり便所でも困るし、床の間でも困る。矢張り支閥が必要で、支閥は一見何も無いよう、これが『マ』であるのだ。

絵を画くのも紙一パイに画くのは、面白くない。絵の空地が『マ』である。『マ』が何にでもくつついて来る。その『マ』を生かすが必要であるが、近頃の人には『マ』を考ふる余裕がない。一寸役者に会つて話をしても、税金が高い、と云う。議員と話せば、選挙費がどうのこうの、と云う。それが世の中である。

昔は「恋わずらい」と云う病氣があつた。経験のあつた人もあると思う。色恋にも『マ』があつたわけである。近頃の恋愛は、オブラートに青酸カリを包んでライバルに服ませ、天国へページした例がある。これでは近松のお色気はとでも生れない。現在の恋愛には『マ』が過ぎ過ぎる。

に迫るおかしみは『マ』の効果である。

その点では、吉田首相は『マ』のこつをみ込んでいるような気がする。白足袋をはき、ステッキを振り、臣、茂と云つたりするのも彼の『マ』であると思う。若し彼にこれがなかつたなら、今日迄の永続きはしなかつたであらう。鳩山でも、重光でも、吉田程長い内閣は作り得ないであらう。彼らは新聞記者に水をブツ掛けたり、ステッキを振り廻したりは、ようしないであらうから。吉田は此の『マ』で国民を惑わしているとも云える。その点で彼は『マ』のこつをみ込んでいたのである。

昔、私も行つたことがあるが、投身自殺をよくする場所、北海道のタチマチサキに、こゝには太平洋の怒濤が打ち寄せているが、「一寸待て」と書いた立札を立て、ある。これも『マ』の効果である。運転手殺しが近頃はよくあるが、あれは『マ』の効果知らぬものである。高校にも『マ』の講座が必要であると思う。

川柳家はそうした社会を一種の色眼鏡でのぞいているのであるが、その社会が愉快な社会ではない。あゝしてはいけない、こうしてはいけない、と色々な法律がある。しかし、川柳家はその法律の枠を身近に感ぜず、ワクの中のび／＼と生きてゐるのだ。

な危険はない川柳家は『マ』の利用は上手だ。『マ』のこつをみ込んでゐる人は、いゝ句を作る。毎月の句会に出席して、熱がきめたら「川中」になるような注射が必要である。

割れるような拍手が起つて、柳話は終つた。その後フト静かさが場内を支配したが、その時、後の森からフクロウの声が聞えて来て、一瞬都會を忘れさせた。

司会者はこゝで十分間の休憩を宣して、選の出来上る迄お互いに話し合うよう要請された。場内は又一しきり賑かになつた。

七時四十五分、司会者は再び立上つて、兼題の披露が次々に行われ、各題「天」一位に夫々賞品が渡され、その度に又拍手が沸いた。路郎先生選の「天」一位は後藤梅志氏で、不朽洞カブは同氏の獲得される所となつた。

かくて八時十五分、記念すべき第一回「川柳まつり」の句会は終つたのであるが、参加者は誰一人立上らうとはしない。路郎先生は再び演壇に現われて、再び今夜の参会を謝し。

「川柳家はこんなにも沢山おられるので、色々な職業の人があられる。此の川柳行燈を作る大工さんから、行燈に電燈を入れる電気屋さん、医者もおれば、神主さんもおつて、何かの折にはすぐとんで来てくれるので大いに力強い。たゞ一つ居ないのは葬式屋さんだけであるが、これにはまだお世話話になりそうでない、御安心願いたい。」

と皆を笑わされた。一同はやつと腰を上げて三々五五と、帰途に就いたので、同会場の模様替えをして、八時半からは、宴会係の心からなる酒肴によつて、さゝやかながら有志四十名の大祝宴が開かれた。酔いの廻るにつれ、のど自慢や隠し芸が出て、一巡した所で目出度くお開きとなつた。時に十時を打つた。

(春集記)
予想以上に好評を博し盛会だった。川維川柳まつりに参加された各句会名は次の通りである——川維本社・川維阿倍野支部・川維梅田支部・川維淀川支部・川維島支部・川維大鉄局支部・川維天王寺支部・川維島之内支部・川維池田支部・川維堺支部・川維浜寺病院支部・川維暖支部・鳥ヶ辻川柳会・杏林川柳会・南海電鉄川柳会・白鷺川柳会・帝化川柳会・みつをつくし川柳会。交通局川柳会・市電交助会川柳会(以上大阪府・大阪市)の各会)なお各地で、川維川柳まつりを開催された各会は左記の通りである——

- 川維布哇支部(アメリカ) 川維京都支部(京都市) 川維貴生川支部(滋賀県) 川維篠山支部(兵庫県) 川維鳥取支部(鳥取市) 川維出雲支部(出雲市) 川維木次支部(島根県) 川維備前支部(岡山県) 川維弓削支部(岡山県) 川維赤坂支部(岡山県) 川維大原支部(岡山県) 川維倉敷支部(倉敷市) 川維下関支部(下関市) 川維宇部支部(宇部)

市川維八代支部(八代市) 川維大聖寺支部(石川県) 川維大和支部(奈良県) 勝英川柳社(岡山県) 以上、順不同

第一回のことと参加不能の会もあつたし、岡山支部の如きは投句があつたが句会の開催が行われなかつた様でありどう誤解されたのか大森風来子氏が特別課題の選を行い、支部報八月号に発表し、作家名を明らかにされたので、役員相談の結果参加資格喪失のやむなき処置をとることとした。各会の熱誠なる協力により第一回「川維川柳まつり」が非常に有意義に断行し得られたことを各会の諸氏に厚く御礼を申上げる。

川維川柳まつり 特別課題



優勝作品並に入選句発表

麻生路郎先生選 路郎賞受賞句

川維出雲支部 相原 一善
婿にする野心誕生日へ招き
従つて榮誉ある優勝橋は作者の所屬する川維倉敷支部が獲得するところとなつた

佳作

帝化川柳會 深見 雅堂
官軍が出て来る祖母の誕生日
帝化川柳會 米永 耕山
一ト誕生壁からやつと手をはなし

- 川維阿倍野支部 小川 恒明 捨てられた日を誕生日として育ち
- 南梅津川柳會 友淵 貴山 積迦誕生日一本が天を指す
- 川維鳥取支部 青木 遊星 苦勞した事には蝕れず誕生日
- 川維京都支部 平岩 司郎 誕生日まだく死ねぬナと思ひ
- 川維出雲支部 尼 緑之助 九人目が産まれ清貧ではすまず
- 川維阿倍野支部 伊達 赤子 気がついた時は誕生日過ぎて居り
- 帝化川柳會 米永 耕山 御招伴の方がはしやく誕生日
- 帝化川柳會 西川 恵撰子 誕生日正座抱かれて良く眠り
- 帝化川柳會 北川 春菓 逆か子だつたを又母が云う誕生日
- 川維鳥取支部 横部 牛歩 信じては居るが誕生日早やすぎる
- 川維島之内支部 西 いわを 日曜に延ばせと父の誕生日
- 交通局川柳會 和田 一 の字 誕生日忘れずババの早帰り
- 川維布哇支部 馬 喜々 別宅は一ト日おくれて誕生日
- 川維篠山支部 小西 無鬼 産声のおろされかけたとも知らず
- 川維津和野支部 赤塚 楽天 カレンダーのしるしは僕の誕生日
- 川維大原支部 安東 雲峯 大安に生れてはまだ芽を出さず
- 川維玉置支部 酒田 清子 誕生日話題は母が一人占め
- 川維鳥取支部 真鍋 一颯 好物がしゅんを外れる誕生日
- 川維淀川支部 西森 花村 苦勞さす母に誕生日祝われる

川維大聖寺支部 野村 味平 誕生の土地にはビルがそそり立ち

帝化川柳會 佐野 白水 誕生へ子の質問は機微にふれ

川維備前支部 永松東岸子 誕生日矢張り裸のまま居り

川維堺支部 吾郷 玲人 娘に酌がれ母に酌がれて誕生日

川維大原支部 本田惠二朗 亡父の歳とうく抜いた誕生日

川維赤坂支部 光好三四詩 誕生を保険屋手くすねひいて待ち

川維貴生川支部 吉原 紅月 誕生日知らず他人の手で育ち

川維大和支部 飯降 白香 母だけが覚えてくれる誕生日

川維木次支部 清水歌句案 過ぎてから気のつく老の誕生日

川維下関支部 高橋まよる 年越して二日生れの娘に届け

勝英川柳社 岡田 夜潮 誕生を待たず二様の名を定め

次に選者路郎師に選後の感想其他に就て述べていただく。

「私としては川維川柳まつりが各地で、それ／＼に盛大に取り行われたことに感激している。各会の幹事諸君の勞は大変だつたと思う。榮誉ある入選会員を出された会は云うまでもないが全員落選の憂き目を見られた会も、第二回の明年を期して一層の精進を期待したい。

催から多くの得るところのあつたことを欣快とするものである。私が多忙なため、各会で予選をしてもらつたので、多少意見もあつたようであるが、予選選者振りなどをあつて知ることが出来て、大変興味を感じたなどもその一つであつた。第二、第三と回を重ねてよりよきものへ育成して行きたいものである。第一回の偉勲者を出した倉敷支部に対し特に敬意を表する」

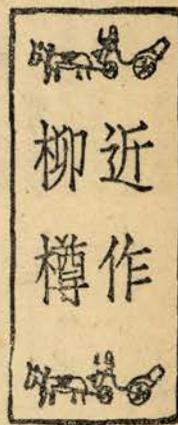
各地各会が、この催しに参加されたゆかいな情報が集つているので、せめてその一部でも発表したいと思うが、最早や余白がないので次号に譲ることとする。

(記事係)

熱眠てきますか？
不眠症・神経性不眠症・神経衰弱・ヒステリーの方に

カルモチン錠
30錠(80円)・100錠(200円)

武田薬品



麻生路郎選
北川春巢選

見送つて来て云い足りぬ悔を書き 大田市 戸田悦子
 好物を呉れるカメラへ鹿素直 同
 新生を喫う人パチンコが嫌い 同
 退社ベルパチンコ屋でも共稼ぎ 同
 出双を持つ手付き花嫁修業中 同
 八頭身だから伴侶が見つからず 同
 不景気へ花火の寄附が派手に来る 同
 女心をつかめず梅雨に欠伸する 宇部市 上林粗影
 朝顔に住み難い世をもつてゆき 同
 哀しみの日は素顔でいればな 同
 映画にでも惚ばん夏の高原 同
 ロマンチストでもなし炭焼の煙 同
 カンナ赫々近く工場閉鎖の噂 同
 逢に出る夜は本筑の帯をしめ 大田市 石川ひさみ
 地獄絵へ姑小姑横を向き 同
 折れそうな男封建主義をもち 同
 捨てられてから腹の子が目立 同
 馬鹿は馬鹿だけの言い分も居 同
 灯をつけて女にかえる帯をしめ 同

はした金貯めて議員になりたがり 兵庫縣 吉原紅月
 油差す様に日給呑んちまい 同
 ヒロボンの效きめ、取る手が確か 同
 仕舞より衣裳の方が立派過ぎ 同
 人生の道草バスだマイシンだ 同
 別々の財布で妻と夜を出る 姫路市 難波愁夢
 ネクタイをまづ緩めて蒸タオル 同
 半生の官吏恭だけがものになり 同
 空魚籠を覗き哲学聴かされる 同
 神様の御意か口紅つけた巫女 同
 金網を隔て、猿と人間と 高野市 伊藤とみお
 身上をすつた話が自慢めき 同
 その規則やはり強者の味方する 同
 愛情のない見送りも手を振つて 同
 扉を下し銀行儲けを算える気 同
 講談社大日本で押し通し 今治市 長野文庫
 とは知らず座布団を出し茶を出し 同
 取っていくさこそ有難い神之恩 同
 醜体を残し天国とやらに行き 同
 與えたと言わず貞操奪われた 同
 拜み屋と医博の診たて同じなり 大田市 不二田三夫
 人妻の説んだら焼けど云う手紙 同
 停電は当分しませぬ初号文字 同
 秀才は呼出しの役村相撲 同
 帯しめて靴とは別な歩き方 同
 日本地図かなしや此処も 大田市 高田一夫
 恩給改正父よあなたは偉かつた 同



打水とドクトル

安川久留美

行きつけの床屋へ行く、明るいこの且床には、いつからか、短冊かけがある。
 父らしい顔で坐れば蠅が来るの句が眼についた、マスターは「蠅」の一字に夏を表したのであるろう？

◇

このごろ亦北国俳壇に寛安風生先生の選句を見て、俳句に川柳のエキスたる人事を加えてあるのに気づく、その一例、
 打水をしてある町を医者通い
 同じ新聞の柳壇（麻生路郎氏選）に、最近「医者」の題詠があつたから、その方へ紛れ込んだものじやないかと思ふくらいであつた。

◇

私の町のMという内科のお医者さんは毎日洋服に下駄穿きのいそがしさである。靴をもたないワケではあるまいが、近所の子供達が



これつぼちのポーナスへ ^と 税が ^と 大阪府	深見 雅堂	花活けて師匠の部屋は夏になり <small>大阪市</small>	竹内花代子
眞理には遠いバイトで苦学する	同	人の和と言うを泌み ^と 感じる世	同
パチンコに押されて老舗又も消え	同	夏季手当どころか会社つぶれかけ	同
防犯の講演会で掬られて来	同	お薬だお灸だ妓腸を病み <small>大阪市</small>	花柳万亀子
物忘れ上手で部下に親しまれ <small>岡山縣</small>	中田 野川	トクホンははつて小姑宵を寝る	同
酔うてても銚子の数はちやんと読み	同	じやがんでる子の眼が蟹を追 ^と	同
平生の豪語に似合わけ軸を掛け	同	花吹かすいとまもあつて変電所 <small>京都市</small>	堀口 欣一
侃諤の校長も居るかぶりつき	同	プロ野球も映画も見ずに妻は老い	同
寓の字で隣りは一人派手に住み <small>大阪市</small>	丹波 太路	螢賣る四條大橋世智がらし	同
商魂は七夕さんも三度させ	同	大学へ通い養子の口探し <small>天理市</small>	菱田 満秋
ナイロンに似る大皿に盛つた鮫	同	気安めに買うおみくじの釣を取り	同
鉄筋の襦袢へ薫風惜みなく	同	容美有財それで 廣告嫁度	同
家族連れお猿の檻の前で撮り <small>岡山縣</small>	片山 巷雨	映画観シネマスコープ見て変り <small>貝塚市</small>	津田 千舟
切り出した別れ話へ三味をとり	同	退院の挨拶柳友から廻り	同
振り上げた蟹の鉄にある虚榮	同	君が代の追放何となく淋し	同
脱線で遅れて無事をねぎらわれ <small>兵庫県</small>	出口白猫兒	主婦の座を嫁に譲つた趣味人形 <small>姫宮市</small>	小浜 牧人
院長も眞顔ブドー酒ならよろし	同	搾取る口で佛の慈悲を説き	同
猫の見る世相魚もとぎれ勝ち	同	警察を辞めて如才のない笑顔	同
仮名遣い原文のまゝ 大家だろ <small>大阪市</small>	早川 野甫	商魂が祭を派手に派手にして <small>貝塚市</small>	苦原 洋史
血圧か肺か電車へ走らない	同	無理するなするなと療友送る朝	同
眞黒な金魚妾宅らしくいる	同	失業へ務めの妻のきれいすぎ	同
田舎道迷うた事を笑われる <small>岡山縣</small>	大塚美能留	メーターを見つめて乗心地悪し <small>岡山縣</small>	南部ひでを
肉体美入道雲をバツクにし	同	とりたてのリンゴのような薄化粧	同
して悪い事ばかりして子は遊び	同	とり入れの疲れを妻とかばい合	同
ヌード集次のお客も見るばかり <small>大阪市</small>	金井 文秋	男の手脊中に廻つて恋と知り <small>御坊市</small>	岡崎 泰三
立川文庫党だつたと作家悪びれず	同	白浜に遊ぶ	同
ミス日本に出る心臓も二十才代	同	うたかたの恋は三段壁が待ち	同

当適切であるかどうかと言う事である。

柳樽編集の意図が必ずしも前句付に忠実であつたものとおもえないし、付句のみの独立化は前句の制肘稀薄化乃至全然無視されたものと言ひ得るから今日古川柳の探究にはその前句迄さかのぼる必要はないものと思ふ。又今日残された柳樽の古句に対する一々の前句を知る術もない。

○ 福田山雨楼

水車氏ののべられた主旨には自分も同感である。柳樽は前句付から独立しているところに意義があるのであつて、その十七字が示す表現のままで鑑賞し解釈すればよいのである。前句がなければ何のことかからぬような句は柳樽には取上げられていない筈だし、若しあつたとしてもそのような句は価値の低いものと云わねばならぬ。

ところが比企修氏の文章のポインツトは外にあることを自分は発見した。と云ふのは六月二十五日の朝日新聞(東京本社版)には「川柳評万句合の復刻完成」と云うタイトルで同氏の一文が掲載されたが、その冒頭に「近世庶民文芸研究会(古川柳研究会)が事業の一つとして、昭和二十四年春から始めた「川柳評万句合」の復刻は、配布四十五回を重ね、こんど百部



パチンコに凝つたと云ふ肩の凝り
 人格者と云う落付きをもつており 近賀郡
 長男としての墓標をよう立てず
 デフレとは悲しい時代并当箱
 夕刊に我が子案じる記事があり 和歌山郡
 病床で母を氣遣う便り書く
 半分は妻の名前の田植する
 補聴器をかけて孫にも逃げられる 岡山縣
 檻覗くような眼もある慰問團
 盆栽をいじる若さは胸を病み 岡山縣
 残飯が白い御飯も療養所
 上京して今度は見て来た数来屋橋 堺市
 商魂は本日限りの日が続き
 どしや降りて禁足おやじの小言 岡山縣
 肉体を資本に基地への汽車の旅
 似てるから其の似顔絵が氣にいら 大阪府
 初発から今日が初まるガード下
 見栄すててしまえば生きる道もあり 大阪府
 囲われて三味もすくけたまゝに 出雲市
 白痴美へ親の情は着せてやり 出雲市
 轉居して釘も好みへ打ち直し
 蚊をたゞきくやはり日本は敗れた 米子市
 涼しさはワイシャツの背をふく 米子市
 隠し芸がうまくて本署へ戻される 下關市
 デパートの安賣りする頃金がなく
 嫁してなのお想う人あり夏の宵 兵庫縣
 人様の恋を見てさえ腹が立ち

同 久保 和友
 同 今井那智黒
 同 大西 樂天
 同 松下 泣虫
 同 辻 圭水
 同 佐々部 謙佐忠
 同 安井 蜂呂
 同 清水 曄子
 同 久家代仕男
 同 太田 香二
 同 宗貞 白馬
 同 森本 花子
 同 西村 花龍
 同 福長 凡八
 同 梶尾 節子
 同 中村九呂平
 同 西尾 鈍白
 同 国正兼比羅
 同 島井 川鳥
 同 高野 不二
 同 川端 柳風
 同 古閑森 行々子
 同 本多 省三
 同 勝田 正郎
 同 坂野壽利庵

嫌われるだけ嫌われてまだ死ぬす 大阪府
 満ち足りて女朝から爪磨く
 一山の胡瓜庶民の市場籠 大牟田市
 細腕の女房に頼ること多し
 秒読みになつて烈しい駒の音 大牟田市
 知性よく母説き伏せた肺切除
 女教師のヘツパーン刈振 岡山縣
 お嬢さん服か着物かまだ迷い
 賣り声がすつかり街を夏にする 下關市
 誕生日手ぶらの友も来て嬉し
 記者と云う肩巾で訪う小学生 松江市
 一人子は朝寝も熱を計られる 岡山縣
 日直が女教員らし赤い下駄
 品見ずに値札ばかりを見て歩き 愛媛縣
 宴會に蠅追う役の三ツ揃
 全館冷房晝寝には涼し過ぎ 新潟縣
 この俺がと云うが集つて村議會
 小説のように巧みにゆかぬ恋 出水市
 第三者恋愛中と見てくれる
 宿酔妻はいゝ氣味ぐらいの氣 玉野市
 八巻にしめて萬蒲の香が帰り 大阪府
 本妻にもませ二号はもんでやり 大阪府
 重役がやれば競馬も趣味となり
 セーラーに包む思春期の体臭 米子市
 洗礼を受けて一生嫁がぬ氣
 日本語でなじり朝鮮語で歎鳴り 京都市

川柳評万句合」と改めたことは原稿尊重の上から問題であるばかりでなく、ユニースバリユウを尊重する新聞の性格から云つても片手落ではないかと思う。

以上の事情がわかつて見ると主題は次の諸点に要約されるのではなからうか。即ち、

一、川柳評万句合の復刻が完成されて柳柳に抜かれた句以外に多くの古川柳が限定的ながら広くわかつたこと。

二、前句付の研究によい手掛りが与えられ、文獻公表の尊い意味のあること。

三、川柳点の柳柳について云えば当時俳諧への踏台として流行した付句の姿をそのままに見ることができ(現代で云えば句会の課題吟の発表を雑誌で見る感じ)柳、柳を風俗資料の立場から見ると場合に難解句の解釈に役立つこと。

天地人制は

最短批評

山本葉光

路郎師が五月句会で『天地人制の在り方』について説いておられたが、句会などの課題吟などでは賞のあるなしは別に、一つの選者の批評として一番に短い感想だと思ふ。

選をするかぎり没句のあるもの



榮進の見込みがなくてへつらわす

兒の寝冷え西瓜は井戸へつけた島根縣

丹念に母は西瓜の種を干し

御婦人がかけて椅子席せまくなり大阪府

大軒だけが寝て居る夜の汽車

子を持たずおねしよの後を穢ま大阪府

ストの日は電車ゴツコの子と遊び

染めて見せ祇めても見せる白髪染大阪府

パンガロージャヅに楽しい夏の月

小説の通りにやつて捕えられ石川縣

サンガラスかけた水着は歩くだけ

お茶代りとは気の利いたお内儀滋賀縣

何か操ぐつたく老妻に勞わられ

貧乏もおんなじ疊叩く音出雲市

宝くじ買つてパチンコ屋に入り

島の内洋館に家紋の祭幕貝塚市

婦人科が来るので散髪へ行かさち

波の音誰か死ぬよな予感する大阪府

大将であつたあの日の服を干し

御神燈の灯がゆれて居る生ビール大阪府

大阪で生れて京の娘に育ち

アパートの窓で七夕様の笹大阪府

太陽へギラ〜〜と齒が光り

瓜切つて借金返す案を練り廣島縣

父ちゃんが無口一家は無事にすみ

豆腐屋へ三里の里もジャヅが鳴り赤松市

金無しの人のみ立たせた〜き賣り

同 星野 侑正

同 木村 十悟

同 永田都詩子

同 川口 秋香

同 中松 一恒

同 土守トン坊

同 坂本竹ん馬

同 小田 柳叟

同 月丘 忠二

同 滝井あすき

同 木下 豊子

同 山田スミ子

同 川西 去水

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

間に合わぬバスは埃を立て〜行き岡山縣

汗知らぬ金はさつさと逃げて行き

兼六園大名屋敷を見て戻り大阪府

お茶席から逃れダンスをして帰り

きつちりと御礼返して交際わす調路市

大阪弁の優雅なところが嫌な僕

雑草も生えぬ畠は高が知れ愛媛縣

農薬にさえや〜こしい法が出来

天井は高くモデルの伸びた足出雲市

保険屋と知つて言葉もあらたまり

理性なお恋の踏切り青と出す岡山市

蔵書印押す爲だけの本を買い

元も子もなく会社潰した長期スト大阪府

御見舞は病室を褒め花も褒め

姑の視線を意識して動き岡山縣

ま〜ごとの様な台所二階借り

召喚の前の静けさ部屋に満ち神戸市

ボーナスが出てから退廳早くなり

ミスボリス母には甘い声になり大阪府

名セリフ彼女に逢えば皆忘れ

スクーターで来るお経のたより大阪府

小言をばこれも日給のうちと聞き

交番の軒へ燕が巢をつくり秋田市

景気よい花火ビールの栓を抜き

日本語がうまく日本最良なり神戸市

友の金をそんなに呑むとも言えず

ポスターへカメラへミスの夏多忙出雲市

石原 文郎

同

岡島 孤舟

同

渡辺伊都志

同

村上 旭童

同

野村 岬月

同

小野花園子

同

増本 翠露

同

大町 別城

同

丸川愁電子

同

横倉漫多朗

同

清水 望峯

同

菊田いさむ

同

三好 兵六

同

原 独仙

残暑御伺

南区医師会文化部

杏林川柳会

(職不明)

河村 瑞川

牟田 一哲

長谷川 迷路

中島生々庵

安岡 珊枝郎

海野比呂史

田中 烏耕

中島 兔庵

平尾 太希志

岩崎 一伸

山川 阿茶

仙波 杏子

やはり一つの批評でもあるが、それでは誠に頼りない。雑誌でも出来れば一年に一度でもいゝから秀句として再選されて優秀句を数句並べてほしいと思ふ。選後感や、研究的な句評が多くなる事は初心者でなくとも誠に愉しいものだ。それによつて、川柳とはこうしたものであると言ふ事が、阿部真之助氏のような評論家にも解つてもらふ事になると思ふ。漫画によつて解つて貰ふ川柳ばかりではいつ迄たつても社会的に川柳はならない。



待ち呆け会う楽しみを拂い 同
 螢狩川の向ふはよく光り 石川縣
 奥様と郷里が同じ女中です 同
 寝て居れば良い病人も雨は厭 大阪府
 松の木にもジャズを聞かせ 同
 療養の身ニコヨンのうらやまし 大阪府
 役に役あつて事務長今日司会 同
 ひよこませみかん箱小そなり 大阪府
 蠅叩を持つと妙に蠅が減り 同
 忘れよの唯一言が冷たすぎ 同
 飛込台飛燕の如く孤をえがき 同
 スクリンへ振子の様な邪魔な首 同
 呼びに来た方がテレビへ腰をすえ 同
 結局はさらつた嫁に着てもらい 同
 牛までも使える母で嫁が来す 同
 診察日女患浴衣のフアツ 同
 癒えはじめ糠味噌の桶病室に置き 同
 ウィンドのゆかた娘は臉で着 同
 禿になるそうだと娘雨を避け 同
 初恋はかくも匂いしフリージア 同
 失業の因は赤旗振つただけ 同
 割引で男日照で嫁に行き 同
 片言を妻は夫に眞似て告げ 同
 スターターの音が嬉しい青年よ 同
 ビーチパラソルをつと南京豆を 同
 父の日といばりきれない暮しなり 同
 母の云う人に自分はなりそこね 同
 常識と云わず教養と云う娘 同
 爪染めて病むあの娘にも夢多し 同

元中尉手柄話で金魚賣り 同
 ボーナスを受取るまでの良妻さ 同
 窓ごしにいと鮮かな投キッス 同
 冗談で笑わせもてゝゝるつもり 同
 とんぼにも弟の記憶呼びさまし 同
 釣天狗狐より竿が尙自慢 同
 物干へ出るにも日焼けすまじとす 同
 看護婦の私服女患に取りまかれ 同
 ぬれ疊まだ乾かぬに又濡らし 同
 蠅叩届かぬ位置で逃げもせず 同
 争いの後吹殻の佗しかり 同
 結論出ぬまゝ吹殻だけ残り 同
 昔からもうかりまつかゝ合言葉 同
 話声すれば病人うめきよる 同
 のど自慢我れも〜が鐘一つ 同
 傳説があつてじやまする木が切 同
 涼台話上手が蚊に食われ 同
 横文字が読めて源氏は苦手なり 同
 内科医で少年ケニヤ読んで来た 同
 育児法知らずに居ても子は元氣 同
 獅子程の金歯保護法もてあまし 同
 鯖烏賊ブランドン迄カウントし 同
 夏婆中性らしい女殖え 同
 喰倒れ大阪に住み喰い兼ねる 同
 病む中に知らぬ新語がたんとふえ 同
 自轉車で裾が気になる若さなり 同
 寄生木が揃つて田植やつて居り 同
 たゞき賣りまだ叩く気のデフレ風 同
 多数党はよろし汚職もかばい合い 同

飯尾 松笑
 佐藤千代春
 木本彌次郎
 山崎 美奈
 深田やよい
 池田 古心
 岸本 木魚
 田中無津美
 亀井 星甫
 木下 義公
 橋本みどり
 清水 和夫
 中林 進歩
 杉森眞沙魚
 奥山 狂
 岡野風の子
 岡本 昭童
 芝原句浪人
 櫻 もみじ
 野田外之助
 荒川 勢園
 皆川 一川
 松下 蘇水
 坂口大三朗
 川西黒ん坊
 星川 陽石
 堀 不漁
 山本九里三
 前田 夢郷

残暑御伺

川雑池田支部

川雑大鉄局支部

川雑鳥取支部

戸田 古方
 黒川 紫香
 村上ゆする
 小池しげお
 竹内圭三
 永藤 彌平
 菊田いさむ
 正本 水客
 阿萬 々々
 松川 杜的
 間島青丹子
 辻白溪子
 大西 八歩
 河村 日満
 森本法泉子
 増田耕民
 杉谷湖山
 青木遊星
 岩原 喬水
 福田たかし
 徳持 晚穂子
 北村 三歩
 原田 敬一



妻秋やバスも牛車をさけて待ち 大阪府
 菊つぎ木今年の台風気にかゝり 大阪府
 老妻を胸ときめかし待つベツト 大阪府
 角帽の長男へ又甘すぎ 大阪府
 男氣を立てた辞表が悔となる 出雲市
 大阪はツバメの宿もネオンつき 京都市
 レスリング誰の胴やら手足やら 大阪府
 測量器土堤のアベツクのぞいて見 西宮市
 未亡人へツブアバンで若返り 貝塚市
 ヒステリーのやゝ箒を持つて立ち 大阪府
 全集が全部揃つて嫁貰い 愛知縣
 恋人が出来て姉ちゃん弱うなり 岡山縣
 それ〴〵に事情があつて養老院 石川縣
 リコールも選挙も済みて町靜か 石川縣
 ストライキ公共福祉忘れかけ 石川縣
 横文字の短冊もある星祭 大阪府
 氣になつた便りが風にのつて来る 大阪府
 寝て食べる身分見舞の友僻む 大阪府
 職長をやり込め重い荷をかつき 大阪府
 ガイガーの一役かつた海開き 大阪府
 給料日拂ひ済まして又借る氣 尼崎市
 奥吉野こんなどこへも稻を植え 奈良市
 寒暖計にらんで見てももうからず 大阪市
 晩婚はあせつたように兒を育て 佐賀市
 子の力今更見なおす大掃除 尼崎市
 老の眼に映る世間は皆忙し 大阪市
 此月給ではと結婚のびにのび 尼崎市
 女の子何時の間にやら爪を染め 大阪市
 誘惑の花束だとはつゆ知らず 岡山縣
 酒煙草喫わぬ夫も苦勞です 大阪市

中辻 橋村
 宮川 斧鉄
 赤塚 樂天
 北林 紫草
 坪井 芳風
 柿本 古竹
 原田つとむ
 永藤 彌平
 護川 梢月
 宮崎 貴代
 飯田 柳庵
 田口 紫陽
 細呂木魯木
 桑山 とよ
 武田 芳子
 芝原句浪人
 川端 鬼醉
 清水 益暗
 喜田喜多八
 小沢 文糖
 林 澄子
 鍛永 晶平
 入江 示羊
 南川 光男
 中井 春子
 坂田 眞一
 山本 貞男
 岡部 発中
 西山 晴々
 三好 澄泉

百ミリの雨で崩れる文化園 岡山縣
 ふんまんのほこさき猫も向けらる 岡山縣
 この辺は御祭らしい兒の衣裳 山口縣
 笑いかから遠くになつたストに居り 鳥取市
 薬呑んでまで呑まなく良妻の愚痴 唐津市
 密談へ妓は遠く待たされる 出雲市
 本職も副業も一緒に失業し 大阪府
 檻の猿疲れぬ子等へ疲れて来 岡山縣
 にわか雨不便なビルが建ち続き 岡山縣
 嫂が二人になつた大世帯 尼崎市
 局員をまたまごつかす市が生れ 岡山縣
 鍵一つ入れて淋しい空財布 岡山縣
 釣竿の忙しそな日曜日 岡山縣
 七分袖になり腕輪欲しくなり 大阪府
 新任の院長聽診三ツだけ 大阪市

及川 南洋
 田淵 笑鬼
 加川 大然
 岩田天保鏡
 新岡回天子
 石橋万古人
 西口 鎮景
 東 靜人
 富池 茂人
 南部龍魯雄
 野田 太郎
 舞島 白郎
 大石 一久
 中谷ハナ子
 半田 夏生

大阪・名古屋・宇治山田を結ぶ

近鉄特急!

大阪一名古屋	2時間55分
大阪一宇治山田	2時間
名古屋一宇治山田	1時間42分

大阪上六発	7.40	8.40	11.40
	14.40	16.40	18.40
名古屋発	8.00	9.00	12.00
	15.00	17.00	19.00
宇治山田発	8.50	9.50	12.50
	15.50	17.50	19.50

座席指定特急券5日前から近鉄案内所で発売

大阪府天王寺区上本町六丁目

近鉄日本鉄道

川柳雑誌社

京都支部一同

左京區下鴨中川原町

岩見 とくし
 岩見 キヨ
 今田 蘇海
 井ノ下 晴芽
 井ノ下 秀徒
 石川 よしろ
 太鶴 喜由
 柿本 古竹
 田中 千潮
 田中 烏雀
 楠 光二郎
 榎本 憲一郎
 八木 迷々
 小林 亀一
 溝川 きよし
 溝川 ちか子
 平井 絵丘
 平岩 司郎
 本儀 親生

東山區清水山町
 今田 蘇海
 上京區衣通上御霊閣下
 井ノ下 晴芽
 井ノ下 秀徒
 東山區山科御修寺本堂山
 石川 よしろ
 東山區岡崎御修寺
 太鶴 喜由
 宇治市開町一三
 柿本 古竹
 北條田部林業指導所内
 田中 千潮
 上京區相國寺北門前
 田中 烏雀
 東山區安井北門東入
 楠 光二郎
 東山區山科
 榎本 憲一郎
 上京區鞍馬口室町西入
 八木 迷々
 東山區山科野子島屋上
 小林 亀一
 東山區山科御修
 溝川 きよし
 東山區山科御修寺下堂
 溝川 ちか子
 東山區山科
 平井 絵丘
 東山區山科御修寺下堂
 平岩 司郎
 上京區小山東花酒町
 本儀 親生



古川柳の現實

への觸れ方

品川陣居

(一) 祝川柳評万句合復刻完成

六月二十五日の東京朝日新聞に、東京学芸大学教授比企修(ひきおさむ)氏が「川柳評万句合の復刻完成」という一文を寄せていられるので、一つのメモランダムとして大要を紹介してみよう。

近世庶民文芸研究会(古川柳研究会)が事業の一つとして、昭和廿四年春から始めた「川柳評万句合(まんくあわせ)」の復刻は、配布四十五回を重ね、こんど百部限定の孔版印刷ながら、A5判四千数百ページの大部なものが完成した。関係者の喜びもさることながら、古川柳研究上のテキストを斯界に提供した功績は大きい。

万句合は散逸し易い一枚ずりであつたため、明治以降、岡田三子、本田深花坊両氏を中心とする収集は困難を極め、今なお未発見

の部分もあるが、一応この復刻が完成して、多数人の手に保存され、滅失の危険を分散し後世に対する責務を果たしたとも言える。

と、比企氏は、その喜びをかく表現していられるが、洵に御同慶の至りである。かつての本誌にお馴染深かつた故森東魚氏も、北京の間(はざま)組の居室で、ほくに大切にしていた孔版万句合を見せてくれたが、やはり今回のもの、それと驟りあるものとおもわれ

る。比企教授の紹介文を、もう少しぬくと、——これは現在千二百六十五枚が分つて居り、その句集は約七万である。川柳の手許へ集つた句は総計二百三十万と推定され、入選は約百分の三と言ふ厳選振である。

この万句合には当時の政治、社会、趣味、娯楽等の總てが克明に推写されて居り、風俗資料としても大きな意味をもつものである。ところがこの応募者の常連の一

人、木綿(もめん)、別号呉陵軒可有(御了見有る可しのシヤレ)と言ふ人が、万句合の中から、付句丈でも意味が通じ面白いものを選び、「群風柳多留」と言ふ単行本にして、明和二年から一年一冊ずつ刊行したが、木綿は天明八年、二十二編を出して亡せ、川柳もその二年後、寛政二年に没した。柳多留の句は二十四編止り、約一万六千句である。

ほくらとしては今迄川柳センスとして大凡のことはわかつていても、万句合が千二百六十五枚も現在までに分つて居るといふようなことは驚異である。

往年、仙台の「杜人」誌に、雀郎先生が連載された「初代川柳と其周囲、川柳鼎談会」でも多くを訓えられたものだが、こういう川柳文献は、いまだ一冊にまとまつていないのである。今度の万句合でもそれが孔版(ガリ版即ち謄写版)であるというのも何かほくらには堪々しいことである。比企教

授も「百部限定の孔版印刷ながら」といつていられるが、それが孔版じたいの印刷能力に限定があるとしても、同好者百人の手にしか、それが渡らないのである。一枚刷の万句合の形や匂いを知るために、凸版が写真版にするのが最良の方法だろうが、そうしなければ、あの独特な書体が完全に判読できないという體みもあるので、一応活版にして内容を完全に知るほかあるまい。

往年柳多留の各丁を凸版にしたものが一冊となつたが、それはやはり判読に骨が折れたようだ。

さて古川柳の解釈、研究は、十七字の付句のみであり、教も少い柳多留では不十分で誤解も起り易く、これは是非とも三十一文字の万句合にさかのぼつて行われなくてはならない。

と比企教授の言われるとおりである。どろぼうをとらへてみれば吾子なりきりたくもありきりたくもなし。

とあつて付句の深い味と、作者の機智もろろかがあるといふものである。ほくらなど研究心のすくない者には、大それたことを言う資格は毫頭ないものであるが、従来川柳界の隘路されて居る印刷への不自由が、川柳母胎に肩身の狭いおもいをさせて居るのは遺憾至極である。

だが、いつかは、今回のような貴重な文献の集積が陽の当る場所へ出て行くであらうとおもふと、今日ではせめて、しつかりした底本を造ることで満足せずばなるまい。

(二) 落首の効用について

ほくらは、かねてから柳種以下の古川柳作者の多くが、「不知読人」であつたこと——それが編集者の独断で、また商業主義の便宜から来たのであつたのだが、期せずしてそれが川柳というものの本質にも当てはまつていたような気がして興味深いのだが、最近の「落首ばやり」の氣運に乗つて一流紙がいろいろ取上げて居る中から、面白い文章を発見したので借用してみる。

川柳第二教室黑板

兼題

「女」 五句以内

メ切 九月十五日

発表 十一月号予定

投稿先 大阪府池田市井口堂町一六四

戸田古方宛

▼第二教室は初心者のために特設したのであるからせいゝ御利用ありたし。(編集局)

作家杉森久英(ひさひで)氏の「落首」という文章である。

去年、僕は加賀騒動のことを小説に書こうと思つて、金沢の兼六公園の中にある図書館をたずねた。市村館長はかねて旧知の人

なので、いろいろ款待してくれただが、款待の方にいそがしくて、あまり役に立つことを教えてくれなかつた。僕もそのほうがありがたいので、またこんどきたとき、と思つて、セツセとビールを飲んでいい気持ちで酔つぱらつて所期の目的を果さないで帰つてしまつた。

そのときせめてものいいわけにもらつた一冊のパンフレットを、東京へ帰つてから読んでみたら、これがなかなかおもしろかつた。「言証(げんぶ)集」という題で加賀騒動の張本といわれる大槻伝蔵が没落したとき、金沢の城下に流布した落首・落書を書き集めたもので、A5判で三十頁くらいがそれです。

柳沢・田沼父子の全盛時代にも落首・落書が盛んに行われて、それらはすべて悪政に対する民衆の怒りを表現したものだといふことを何かで読んだことがあるので、これもそのようなものだろうと思つたのだが、どうもすこし勝手がちがう。民衆の作にしては、すこし高級すぎる。古典的教養がありすぎる。

僕は、もしかして、これらはみな、同一人の作ではないかと思つた。というのは、この集の原本は、奥書によれば、大槻全盛時代の政敵前田土佐守の自筆本だからである。そして、どの落首・落書も、発想や手法が似かよつていゝ。土佐自身の作でないにしても彼の息がかかつていないはずはない。

いま一人の「成上り者」が政権

をにぎつたとして、彼をもつとも憎むのは、彼によつてヒヤ飯を食わされた旧臣や同輩連中ではあるまいか。当時の『民衆』はといえば、支配者が誰であつても、支配機構がかわらないかぎり、それはど自分たちの生活に關係はないのだ。「民衆」はこんな器用なし、かも危険なマネをする理由がない。また、すこし利口な政治家ならば、政敵をたおすために、落首・落書という有力な武器を利用しないはずはない。—それ以来僕の落首・落書についての見方はかわつた。柳沢・田沼時代の落首はどうかしら？ 歴史家の示教を受けたものである。

おもわず全文をぬいてしまつたが、たしかに落首としての効用をもつからには、杉森氏のお考えには、たしかに妥当なものがあるようだ。

われわれの川柳が、みなみな落首的効用を狙つたものでないことはいうまでもないが、柳釋の中には、落首めいたものが多々混在している。古川柳作者が、いわゆる百姓町人の出の者はかりでないことは大凡そ推察されるのである。旗本の次男坊、浪人といつた世の中の姿にあきつたなくおもう連中の、ニヤリとして煙管で頬を叩ませながらの戯作としてみてよい、ではないか。

富士野鞍馬先生の該博な御意見などが、こゝろ疑問に感えて頂けるものではないかと、かねがね考えているのである。

望・展・界・柳

▼本社川柳懇句会は九月十一日(土)午後六時から下寺町二丁目バス停前の光明寺で開催される。求会を歓迎する。▼阿波踊見物と鳴門観潮吟行は八月十四、十五日に賑やかに挙行された。▼通信病院鳥ヶ辻川柳句会は八月二十一日午後二時から三階図書室で開催された。▼南海電鉄川柳句会は八月三十日午後六時から粉浜の親和寮で開催。▼南区医師会杏林川柳八月句会は、南海線諏訪森の生々庵居で終日開催された。以上何れも路郎主幹出席。▲川雑淀川支部九月句会は九日午後六時から東淀川区三津屋北通四の二九武部香林居で開催兼題「散歩」一「墓参」一「カメラ」。▼川雑弓削支部八月句会は七月夜開催され町長益は弓削平氏が再び獲得。▼恒例文化祭の行事、大阪市民川柳大会が大阪市教育委員会・大阪川柳連盟共同主催の下に十月三十一日(日)午前十時から開催される。会場未定、其詳細は次号に発表。▼広島川柳会第二例会が七月十五日午後六時から広島貿易会館で開催された。

▼海水浴川柳大会が岡山県下川柳人によつて八月八日波川海水浴場で開催された。▲交通局川柳会(大阪市)は八月二十日午後五時から交通局病院五階サニールムで開催。▼中日川柳句会(名古屋)は九月例会を十八日午後五時から中日本社第一会議室で開催兼題「減る」一「鮮山選」一「忘れ物」一「扶桑選」一「素性」一「孝三郎選」。▼虹川柳俱樂部(唐津市)九月例会は十八日午後七時から回天子居で開催。▼川柳宮城野社(仙台市)では柳誌宮城野を主体として第二回宮城野賞を設定された受賞者は東華抄(同人)清月集(一般会員)本年度活躍の新人より各一名とのこと。▼第三回川柳大会(河北川柳九周年記念)が河北新報社宮城野川柳社共催で九月廿六日午前十一時から仙台市東二番丁河北新報社大ホールで開催される。▼鷲田南耕氏が五月十八日八十七歳の高齡で亡くなられたとのこと謹悼。▼花屋久次郎追善供養(東京市)が八月十二日午後三時から川柳きやり吟社台東川柳人連盟発願によつて菩提所台東区東岳寺で営まれた。▼山沢英雄氏校訂「俳風柳多留」(四)が昭和二十九年七月廿五日に刊行された発行人所は東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三株式会社岩波書店定価八拾円。▼川柳万葉句集が七月十五日に大阪

瓦斯舎密川柳会から刊行された。金泉万葉氏の自選五百句が収められている。佳吟に富む。(非売品)▼難波愁夢氏(姫路市)は母堂が老境に入られたので孝養のため郷里岡山県上房郡上有漢村金倉に茅淳夫人同伴で帰郷されることになり今後趣味生活に生きられる由。▼久保和友氏(滋賀県)は毎日新聞主催の高野山夏期大学へ出席、「仏法僧と一緒に遊ぶ二三日」の句を寄せられた。▼大島瀧明氏(熊本市)は用務のために天草へ行かれ、本渡市で曾て安東に居た玉田蒼草氏と欲談されたとのこと、「詩の鳥絵の鳥天草夢の鳥」の句を寄せられた。▼増本翠露氏(大阪市)は七月二日痔の手術のため大阪入院十八日に退院された。▼渡辺伊津志氏は釧路市港町釧路海上保安部巡視船「一とかち」に移られた。▼万よし・庄健一氏が八月十四日午後九時廿分に脳溢血のため逝去された。謹悼。

「アサヒビールはあなたのビールです」





川柳第二教室

戸田古方

六「酒」の句から

調子が悪い。住むといわないでもわかる。

酒ぐせは転々としてまだ長屋
①一人前何はともあれ酒だけは

あれ酒だけは一人前」とつづけ
たら平凡な散文です。

①息こらし鏡にうつし盗み酒
「息も息だが鏡の中の盗み酒」

となおしました。息こらし、鏡に
うつしは一応リズムがあるよう
すが、うつしというより鏡の中
方が余韻があるようです。

②本でおくお酒にママの目に火
花

二本だけというのにママのきつ
いこと
二本だけのお酒にママのきつい
こと

松山市 前田 伍健
ふみつける面なくくらげばたり座す
管長も無言今の世一喝なし
年寄も男は得と老マダム
新聞と牛乳別荘まだ寝てる

成清公子を悼む
病まけするなど言えは指を切り
長野県 高峯 柳 兒
禿だけが先代に似て落振れる
不景気も外交儀儀を正して来
すぐ恋を受入れそうないヤリンド
病人の取柄食慾あなどれず
役得の酒で世渡り鍛え上げ

詠 近 舟 同

「飲む段になれば一人前はの
み」と改作してみました。「酒だ
けは」というような結び方は極く
幼稚で耳ざわりです。「何はとも
⑩最愛い極楽にする一合酒

五月十五日にメ切つた句、お待
ち遠さまでした。普通の課題吟の
披露ではありませんから、ただ選
句をならべただけでは意味はあり
ません。教室だからといって成癡
ということばを使うのも一寸堅苦
しくは感じますが、集つた一四四
句を、A七、B八、O八、D二一、
E二七、F八、G一三、H二六、
I二六とわけてみました。没にな
る句を細く段階にわけてしまし
た。A・B又はA・B・O位が普
通抜ける句、D・Eが平凡な句、
F、着想は面白いがという句、
G・H・Iは手を加えねば水準に
達せぬ句。

①酒ぐせに転々として長屋に住み
なり
原句のテニオハが奇になりすぎ
ています。傍線のところをなおし
て
これしきで酔うてはならぬ幹事
なり
①酒ぐせに転々として長屋に住み
なり

最はモットモでもサイでも語調
が悪い。

「ごく安い極楽にする一合よ」
ぐらいで如何。それに一合酒の酒
は不要。

⑩只酒が歴史を作る情けなさ
情けなさが気になります。感情
を説明することは出来るだけさ
けた方が余韻が出ます。「只酒が
こんな歴史をこしらえた」

⑪飲む会費いつも得する酒豪なり
飲む会費、酒豪、もつといいこ
とばがありそうです。

「飲まぬのがいるのでなあと酔
うている」

⑫悲しみを洗う夜淡く鞠む酒
感じの句としてそう劣つた句
ではありませんが、酒という言葉
はやめた方がよさそうです。「悲
しみを洗う夜なり淡く鞠む」

⑬妻も娘もやめてほしいと梯子酒
やめてほしいが乳臭い。「妻も
娘もちゃんと知つてる梯子酒」で
充分。

⑭酒だ酒この淋しさを温めん
このまゝでもよいが「酒だ酒
だ」と「だ」をくりかえしつけた
方がよさそうです。

⑮寒いなあ飲み仲間にはよく通じ
よく通じをやめて「寒いなあも
う飲んでいる飲み仲間」

⑯訳あつて晩酌よせば妻案じ
訳あつてはどうかなあ「晩酌を
よせばよすにて妻案じ」

⑰禁酒断行見ん事徳利派手な音
わつたといわずに見ん事と派手

な音であらわしているが、禁酒と
むすびつけると大そうすぎる、い
つまでつゞく禁酒やら。

⑱嗜好欄大きく一字酒と記す
豪傑の風格はありますが嗜好欄
はすききらい位の方が自然ではな
いでしょうか。記すとありますの
で何かかいたことはわかりませ
す。

⑲平社員酒の力も封じられ
いゝ見つけどころです。飲んで
もいゝたいことはいえぬもどかし
さ。

⑳本心を酒で言つてる小役人
この小役人の方が平社員より幸
福です。

㉑告白をする気の猪口のほろ苦い
告白とほろ苦いの結びつきが凡
なんですがそう思うのはインテリ
の弱さか。

㉒盃が器用に動くはでな宴
こういううちに気の弱いものも
本人をちよつぷりのぞかせたりし
てしつ尾をつかまれるのです。具
体的にもつとつゝいんだらと思
いますが、とにかくいい写生です。

㉓大空の心も知らず下戸と生き
⑲名もいらぬ生命もいらぬ酒の味
両句とも水準に達しているの
ですが、比較すると、名より、生命
より酒という常套語をつかつたよ
りも大空と出した方がよさそう
ですが、下五の下戸と生きに二工夫
がほしいようです。大空は「さけ
とろりとろり大空のこゝろかも」
の大空です。

㉔酒のめばのめばうれらしいの深か

りき

- ⑨ 忘れたい記憶が酒に流されず
- ⑩ の句の方は、忘れたい、と流されず、が目につかへり、耳にひつかへります。⑩ ののめば、のめばのくりかえしは酒境をよくあらわしているようです。うれしいの深かりきは「告白をする気の猪口のはろ苦い」とおなじインテリのおお白さでしょう、詩人らしく表現しようとする明治以後の句によく見かけます。
- ⑪ 孝行は生一本提げて夜の汽車
- ⑫ 一升びん提げて無沙汰がやつてくる
- ⑬ の方ははつきり人物が出ています。⑭ の方は見えだけのことです。生一本の生はこの句のよさを増します。口調もよいし、孝行らしきものはつきりします。
- ⑮ 酔つてないつもりが下駄を履かされる(凡八) 下駄を履かされるのは面白い見つけどころ
- ⑯ 「酒なくて」なんののかんと梯子酒(天保銭) なんののかんとロレッツのまわらないことをいつている。
- ⑰ 酒呑みの親父であつて意見せず(花団子) 子の方も呑ん平か、
- ⑱ 商いは飲んでからまとまり(治義) 七七の句としてよくまとまつている。
- ⑲ 目出度さを一人で背負つて酔いつぶれ(修) うれしいですね。
- ⑳ 酒ちびりちびりの味につくがなく(翠露) 「なあちろりこれから

- 秋に親しもう」には及ばずとも
- ㉑ 宴会の酒はやたらに酌ぎたがり(賀峯) 「盃が器用に動く、一歩進歩したものか
- ㉒ 酔うた時だけ飛び出す国なまり(朝風) 酒のめでたさ、平生は口には出てこないが。
- ㉓ 君うれしそに見えるかい酒(凡九郎) うきうきしてきます。
- ㉔ 平凡な暮しを乱す梯子酒(天保銭) 凡想、凡表現ながら読み捨てられない。
- ㉕ 飯鉄を喰つてから急な酔い(風来子) くらつてと読むと凡
- ㉖ 小心者酒の威力で愚痴を言う(雄峯) さき的小役人や平社員の句より素直でよろしい
- ㉗ 焼酎も酔えば結構派出になり(凡八) 焼酎ならこそ面白い。
- ㉘ ぬる間が好きなことまで父に似る(碩水) 通人は父子相伝。
- ㉙ 一合の酒へやさしい妻の酌(一の字)
- ㉚ 昇給へ一本つける母の酌
- ㉛ やつぱり母より妻の方がよさそうです。
- ㉜ げんこつで鼻をこすつたコップ酒(東岸子)
- ㉝ (左手で蝦をつまんだコップ酒(東岸子)
- ㉞ 蝦の匂も悪くないがげんこつで鼻をこするのは断然及びません。
- ㉟ 女房がだまつて飲まず程儲け(天保銭) これだけ儲けられたらなあ。

① 酒となつて君が身を巡らん(正斗) いつしんどうたい、かいろうどうけつ、ただしは追憶の句としても身がしまる。

② 酒飲みのそれ程酒の名を知らず(凡八) 名なんぞなくもがな、た酒を愛す、酒を愛す。

③ 禁酒したのは膝の子の生れた日(修) どの要素もカツチリ、ピツシリ。一寸のすきもない、しかも善意の句。

④ 曾て来た店へひとり来て酔えず(正斗) 堅い酒の味がほぐれてこない。

ホーム雑談

久保和友

北川春葉さんの句に
 遵法斗争駅の時計も遅れてい
 というのがある。私も鉄道に
 るのでこれについて色々考えてみ
 た。国鉄職員はスト権がないので
 ギリギリの線の闘争しか出来な
 い。

組合員は助役、区長又は駅長が
 当局側になるので闘争中はいつも
 面とむかつて顔をつき合せてい
 るので具合の悪いこともあり此処で
 闘争委員のひとつ覚のような職
 制の圧迫Vというのがあるが私は
 このA職制の圧迫Vというのを非
 常に面白いと思うし国鉄らしいと
 思うのである。A大家族主義Vと
 並べてみての話である。闘争が

なければ国鉄というところは非常
 に楽しい職場なのだ。家族主義が
 発揮されて同じ釜の飯を喰う間の
 親しさも湧くのである。こういう
 職場はある意味では他にないの
 ではないか。あるとすれば旧軍隊の
 ようなところA俺とお前は同期の
 桜Vとなるのである。但し今の防
 衛隊がどうなつてゐるかわからな
 いが同じ職場で生命をかける、あ
 る意味では責任重大なこういう職
 場であつてこそ大家族主義が生れ
 るのである。これについて第三者
 からいろいろと非難されるがこれ
 が国鉄のカラードではないか。そう
 思うのである。これが年中行事の
 ようになつてゐる闘争ではそうた
 いそんなものではない。

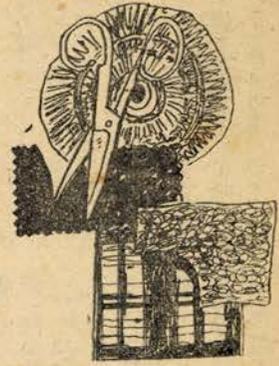
路郎先生の
 人生は悲しからずや左派と右派
 誰かにあやつられてゐるのであ
 る。右派と左派などないと言つて
 しまつてもそれはあるのである。
 生きにくい世の中ではあるが
 先輩堀川蘇堂さんの
 駅長の机上に或る日資本論
 となるのである。解雇された三
 役がまた再選されて問題を起した
 がその三役が出した闘争指令とい
 うものが下へおりてきて消化しき
 らなくなる。やれストだやれビケ
 だやれ五割賜暇だといつてもやが
 て誰もうごかなくなる。
 ストよりもやはりお客が大切だ
 と知つてゐるからである。春葉さ
 んの句の時計がおくれているのも
 気になるがそれよりもつと汽車
 が動かなくなればつと淋しいの
 だ。ストだビケだのと行くのは主
 として若い職員が行つて夢中で赤
 旗を振つて労働歌をうたつてい
 る。これは果して美しい景色かと
 思えばそうではない。誰かに動か
 されてゐるのだ。こういうことが
 国鉄の闘争以外にいくらあるかも
 知れない。闘争でなくとも生活で
 もだ。銃をとれと言われれば銃を
 とり戦争謳歌の川柳を作れといわ
 れればそれを作る川柳家も出てこ
 ないとは限らないのだ。例を身近
 かな国鉄にとつてみたがこれはい
 ろいろ考えねばならないことだと
 思う。

対話
 後輩「川柳とは何ですか?」
 先輩「嘘を書かないことだ。」

小児科 平尾醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇
 電話 戎 一六四三番

(4) 評時柳川



滑稽文学論

——書評に代えて——

藤本満年

「外国には洒落や滑稽に関する研究が少くない。独逸文学などは比較的笑が乏しいようだが、研究の方面には中々すぐれたものがある。日本文学には、昔から夥しい笑の量がふくまれている。だが、それを秩序だてて述べたような書物は案外少い。その洒落や滑稽を分析し、笑の意味を考へること、やがて日本文学の一つの特質を明かにする結果にもなるだろうと思ふ。」以上は最近東京都文京区本富士一の財団法人東京大学出版会から発刊された文学博士麻生磯次氏の著書「滑稽文学論」のしがきの一部である。

考へて置くことは、その文学の意義を明らかにする上に必要である」といつていっているとおり、洒落についても、笑についても、いろいろな角度から理論的に解明されている。しかも、全文いたるところ、洒落や笑の文学として川柳が引例されている。

例えは、不調和が滑稽感を催す実例として美しい顔で揚貴妃豚を食い（柳拾遺四、一八）寂寞として先生は鰻を食い（柳拾遺一、二八）また理論の筋道として、川柳を滑稽文学として取扱ひ「一般に川柳の内容は、人情美であるといわれている。その人情は、人間本来の自然の情をいうのであつて、方便的な功利的な意味のものではなく、義理とか見栄の人情ではない。従つてその人情の取扱ひ方は甚だ広汎であり、融通性を持つてゐるのであつて、男女の情のみではなく、親子の情、夫婦の情、人間愛、自然愛というものも扱つてゐる。」

寝ていても団扇のうごく親心（柳一、三一）旅展り子をさしあげて隣まで（柳一、三五）という説明などは明らかに川柳文学論である。こうした論理の進め方は全巻いたるところに出てくるのである。だから滑稽文学の主流が川柳であることは否定の出来ない事実で、この書を通説していると、いつのまにか川柳文学論を説んでいる気持になるのは当然である。川柳家としては是非一説の価値のある名著として推賞したい。しかも定価が百円、一種文庫版であるから、買うにも値段が張らず、携帯にも至極便利というものである。

川柳の作句論については可成り沢山な書物も出てゐるが、川柳文学論は殆んど影を見ない。雑誌その他で、断片的な文章に接することは稀にはあつても、系統的な文学論は非常に珍らしく、私はこの書によつて強い感銘をうけるものがあつた。しかし、麻生磯次博士が国文学者であるため、取りあげられた川柳は古川柳に限られてゐる。それはやむを得ないことであるが、私たちは現代文学の一ジャンルとしての川柳文学論を待望してゐるのである。同じ日本文学で、しかも同じ短詩形文学である短歌や俳句の現代文学論はあつても、川柳にそれを見ないことは甚だ淋しいことである。京大の桑原武夫博士の俳句の第二芸術論にしても、第二であろうが、第三であろうが、わが文学界における俳句のウエイトを十分に認めた証拠にはなる。川柳は第二芸術論の対象にもなつてゐない。

川柳が詩であるかどうかについては、理論闘争が行われてきた。だが、仮りに川柳が詩でもなく、芸術でないにしても、文学にはちがいない。そうすれば川柳文学論が学界からしても、川柳界からしても大いに登場して差支えないものでないかろうか。殊に現代川柳は古川柳の感覚では説明の出来ないほど幅の広いものになつてゐる。路郎師の句集「旅人」から句を借りてきて

いつからか死後の準備もしてるなり
愛人が雪の中の黒点となりぬ
凡聖一如元旦のころ知る
酒とろりとろり大空のころか

などの句を見て、川柳雑誌三二四号の長野晴浜氏の意見のように、おかしいと表立つていうのが憚られるようなおかしみを裏付けてゐるかも知れないが、少くとも滑稽文学といえるかどうかには疑問である。川柳文学は滑稽文学に入

るものもあるが、入らないものもある。だから川柳文学の全部を包含する川柳文学論でない、川柳文学を論じつくしたことはならない。それはまた一面からいへば、川柳文学論が登場するほど、川柳文学の充実と発展がなければならぬということにもなるのである。

久米南町合併記念
弓削小学校講堂落成

第六回 西日本川柳大會

△日時 九月十九日午前十時
▽場所 弓削小学校新講堂
△兼題 (各題三句徴守) 一怒一
大阪・麻生路郎選「辛抱」鳥取・大
西八歩選「働く」吉永・浜田久米
雄選「無事」大阪・武部香林選
一支関「岡山・大森風来子選一夜
明け」弓削・福島鉄児選「義理」
弓削・家本富至選「星」岡山・服
部十九平選「意外」津山・橋本晴
の助選

○柳話 麻生路郎師
○呈賞 兼鹿題各三光(出席優
先)

○会費 三十円(出席者)
○投句料 二十円(兼題投句料)
○兼題投句 九月十二日
○投句先 岡山県久米郡久米南町
福島鉄児宛

○投句注意 投句は各題一句毎に
タテ六寸、ヨコ一寸の
白句箋に書き、裏面に
雅号を記入、尙出席予
定も投句料三十円を添
え期日迄に提出のこと

主 催 弓削川柳社
後 援 久米南町・弓削
商工会・久米南
町教育委員会
弓削農業協同組
合・山陽新聞社

老地柳壇

投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼開催月日及場所記入▼締
切毎月二〇日▼投稿先本社宛

川雑川柳まつり

川雑本社並びに

大阪府市各支部主催

七月十日 於 大覚寺

川柳まつりの記事及び当日の兼題「誕生」の入選句発表は本誌十頁参照。本欄には他の兼題の入選句のみ掲載。不朽賞優勝カップは後藤梅志氏獲得。

出席者 路郎・多久志・古方・雄声・喜好・潮花・しげお・彌平・紫香・花村・梅里・香林・小松園・光二・野甫・真一

白柳子・竹荘・丁路・いさむ・文蝶・京一棧・凡九郎・秀米・白溪子・南天郎・昭童・没食子・水堂・久子・天真・ひろ

し・いわを・木声・澁月・都詩子・一の字・球児・文秋・栗・黒天子・淡海・梅志・貴山・文夫・孤舟・杏花・白水・生々庵・珊枝郎・玲人・一三夫・裸木・六

竜子・静馬・省三・花香・一朗・葉乙女・耕山・雅堂・華泉・賀峰・三平・辰始・恵撰子・喜久堂・一平・大然・方眠・句

軒・清潮・万葉・香水・柴舟・豆秋・夢生・春葉・光広・一瓢・望峰・草白・潮

路・圭水・甚也・一榮・義英・洋一・才一郎・操・章雄・清子・章子・寛峰・緑

雨・博也・鮎美・一点子・恒明・十悟・

愛論・史葉・喜仙・秋香・赤子・淡舟・三司・梨里・霞乃

兼題「伴」 麻生路郎選

小遣いをやれば雨でも伴居ず 花村

名優の伴叱られてばかり 文秋

入りむこを伴伴と大事がり 賀峯

蠅一疋居ない伴の新家庭 澁月

労組の伴の意見こわくき 久子

異母弟のある伴にがんばられ 没食子

栄転の伴の地位を駅で知り 澁月

未亡人伴を頼りきる姿 いさむ

いつの間に伴に不精ひげがあり 白柳子

悪友は伴の方であつたのか 恒明

内幕も知つてた伴の綴り方 十悟

注射器をせがれの机から見つけ 望峯

株買つてみんな伴の名義にし 賀峯

小伴が医学博士になり居つた 豆秋

どたん場となつて伴に相談し 大然

伴もう還暦祝う歳になり 満佐志

伴には負けても白をゆずらん気 同

父親の酒のさかなになる伴 たもつ

言うことを聞かぬ伴を自慢にし 香林

社長もう伴のポストきめている 夢生

東京の伴は共産党になり しげお

父のセコハン間に合わぬ伴なり 一榮

ワンマンも健一だけは風馬牛 へとち

親父より物判りよい伴なり 喜久堂

マルクスが好きな伴を持てあまじ 夢生

ラジオ今伴が打つたホームラン 豆秋

もうろくを伴笑うに笑われず 杏花

御じぎして伴が帰る夏休み 彌平

父親の弱身に触れずいゝ伴 小松園

スタンドで伴に出逢いおこられ 竹荘

商法に伴の意見容れられる 甚也

伴もうすなおに意見聞いて居ず 真一

三人の伴死なして芸に生き 秀米

親に似ぬ伴にハラ／＼して暮し 淡舟

商魂は伴に譲る歳となり 一朗

海越えた伴の便り記事にされ 秀米

伴迄もうしつているトンゴ節 昭童

それがしの伴貴殿の息女好き 貴山

軽率な母へ伴の腫が制し 文夫

伴もう酒の力を知つている 潮花

重盛の顔して伴意見する 雅堂

気の弱い伴に母は函がゆがり 文蝶

伴からの便り結局金が要り 文夫

伴には負けぬ闘志がまだつき 文蝶

莫遮伴の意見通るなり 栗

呑むだけの父がはがゆい伴なり 文夫

伴もう明治の智慧をけむたがり 一の字

伴からお古を貰う年になり 花村

いゝ伴それは人から見ての事 一の字

天皇のことで伴と少し揉め 梅志

伴もう淋しがること覚えて来 路郎

小伴のくせに香水匂わせる 同

兼題「バンガロー」中島生々庵選

夏季手当コンパで山のバンガロー へとち

善音機止んでバンガロー風寝らし 花村

バンガロー星座に近く深呼吸 鮎美

雑語を順番に切るバンガロー 一瓢

バンガロー 雑切り忘れ借り歩き いさむ

バンガロー 女やつぱり髪をとき 天真

一つづゝ灯も消えてゆくバンガロー 十悟

バンガロー ども雀のお宿なり 梅里

青春をもてあましてるバンガロー 淡舟

バンガローに住めば知性のあるつもり 省三

よい月をほめてバンガロー寝るこする 方眠

星へ手が届きそうなりバンガロー 小松園

蚊やり火の煙バンガロー更けている 貴山

バンガロー世帯を持つて見たくなり 多久志

スイス製ですバンガローで持てなされ 香林

レコードが鳴つてバンガロー灯が入り 紫香

バンガロー窓からのぞく顔若し 清子

ほん／＼もバンガローに来てめしをたき 登志子

バンガロー白米ばかりの飯が出来 葉乙女

へツアバインに風ありバンガローの雨 潮花

バンガローの星にレイの夜を思い 没食子

バンガロー溪の景色を褒めて下り 香林

こん度目は貴男と呼んでバンガロー 六竜子

バンガロー二泊三日の垢がつき 一の字

バンガロー出るに雨あちち雨となり 丁路

バンガロー朝見る景色広くなり 甚也

バンガロー人間の巣を鳥覗き 葉光

まゝ事の飯をこがしたバンガロー 杏花

兼題「毒味」 橋本縁雨選

つまみ食いこれも毒味にしておう 甚也

新世帯夫婦一緒に毒味する 孤舟

毒見などいゝもんかいさよを喰い 真沙魚

毒味だと言いつゝ鍋が空になり 透水

毒味する様に抹茶頂戴し 天保鏡

毒味してまでも食べたいふ料理 一の字

毒味して料理の味をほめている 竹荘

毒味してから証文に印を押し 鮎美

宮中の毒味勿体なく勤め 澁月

毒味する手付も慣れたコツク長 京一樓
 無駄口を叩いて板場毒味する 淀月
 毒味とは言わず女給は先に喰い 三司
 あれも毒これも毒味と子を育て 同
 毒味して惚れた女は飲ませて居 いさむ
 毒見する役幹事の席の席に居る 清潮
 台所で毒味しててるを見付けられ 豆秋
 毒見などする水臭い仲でなし 梅里
 こりやいけるいり毒見平げる 十悟
 毒見する頃に夫が帰つて来 昭童
 毒見して客に進めるてつ料理 秋香
 出しやはり言われても毒見する 香林
 それとなく毒味をすす母ごころ 小松園
 毒味するだけ勘定にいられて炊き 三平
 毒味してもろうた膳へ畏まり 水堂
 毒味だけされて取引はかどらず いさむ
 兼題「湯上り」 市場没食子選

湯上りが浴衣着のまゝ靴をはき ひろし
 湯上りへ又急用が飛んで来た 花香
 湯上りも男は男らしい巾 凡九郎
 湯上りのまゝぶらぶら 章子
 湯上りの汗をふき 木声
 湯上りの浴衣の糊がピンと立ち 京一樓
 湯上りの浴衣も揃いの旅のやど 操
 湯上りの子供の遊び足らぬ顔 玲人
 湯上りへ誰かどお辞儀して通り 一の字
 おごられて居る湯上りの酔心地 文蝶
 湯上りの素顔へヒキ待つてゐる 竹莊
 湯上りの素肌から洗髪 一の字
 湯上りへ工場の悪臭ついて来る 秀米
 湯上りの汗がひかない子供づれ 裸牛
 湯上りで来てナイターの指定席 句軒
 湯上りをビール冷蔵庫で待機 春菓
 湯上りの脊中を孫が拭いてくれ 一榮
 女湯を待つ湯上りの掻き水 吞水
 湯上りのまゝの姿のすゞみ台 南天郎
 湯上りを待つてる膳の蠅を追い 木声
 天花粉だらけでお湯の子がかえり 梅里
 湯上りの肌へ蚊が刺しに来る 勝己
 湯上りへバリの浴衣出してくれ 賀峯
 伊達巻の姿態湯の香がまだ残り 潮花
 湯上りの肩から浴衣落ちかゝり いわを
 先着はもう湯上りの顔で待ち 紫香
 デッサンのまて湯上り戻つて来 一三夫
 湯上りの化粧これから金になり 京一樓
 湯上りに風を入れつゝ虫を聞き 天保銭
 湯上りの派手な浴衣で酔い呉れ 葉光
 湯上りへ風は月賦の扇風機 たかし
 湯上りの様湯上りの化粧品 花村
 湯上りへしぼんだ乳房出したまゝ 彌平
 湯も出て祇園は猪口で受け 淀月

湯上りへ長距離かゝる忙しさ 梅志
 湯上りの頬にひんやりぼたん雪 多久志
 朝顔の蕾をさがす湯の上り 大然
 湯上りを待てず一人で呑むビール 恒明
 湯上りの女も飲ける猪口を受け 三司
 団扇片手に湯上りやつて来る 一朗
 湯上りの足へ廊下がザラついて 万葉
 よう肥えてまゝと湯上りほめられる 竹莊
 湯上りへ首が廻らぬ扇風機 夢生
 湯上りの立膝のまゝ差し向い 葉光
 湯上りの女に見とれけつまずき 香林
 湯上りのもうおちよんも来て来た 鮎美
 うで蛸になつて風呂呂から上つて来 豆秋
 湯上りの諸肌脱いで髪を梳き 喜久堂
 湯上りで窓から暮れる富士を褒め 没食子

川 梅田支部句会 (大阪市)

七月二十六日 於 阪神ビル三階

水谷鮎美報

大ジョッキさかんにのめし頃のこと 鮎美
 きりぎりす夜店の方は鳴きもせず 悦朗
 平熱になつて聞いているきりぎりす 一夜
 失業の庭に真風のきりぎりす 杏花
 遠花火夜釣の人にきれいな過ぎ 鮎美
 わが恋も花火に似たり燃えて消え 忠雄
 父さんは裸で見る子の花火 杏花
 えりあしの白き花火がスッ消え 夢生
 音のせぬ花火を末の子に持たせ 一夜
 売られ行く娘が振り返る遠花火 杏花

川 淀川支部句会 (大阪市)

七月六日 於 香林居

武部香林報

身を焦す聲になつて見たい恋 多久志

灯をさけて二足下る螢売り 香林
 行水の母へ螢を見せに来る 若菜
 検針日来て家計簿を縮くゝり 礼三
 メーターの上つたまゝ自家の前 多久志
 メーターを無視して払う機嫌 真一
 お下げよりペーアまで、女の子 一策
 お化粧が日課になつた女の子 文平
 女の子母さん役になりたがり 志津子
 女の子いつの間にかやら爪を染め 堯中
 まゝごとの母ちゃんも金足らぬなり 香林
 老眼をはづして妻と呑む新茶 水堂

川 阿倍野支部句会 (大阪市)

五月二十六日 於 西光寺

須崎豆秋報

瓦まで取るとは云わぬ差押え 賀峯
 瓦屋で値切れば音をきかされる 幽王
 瓦一枚修しに昇る五月晴れ 徳三
 代議士に狙上の鯉を見せたいな 弘道
 見る人もなき別荘の鯉がはね 香林
 鯉が一つ鯉もまぢりもれ合い 葉光
 街頭に立つて諸君も板につき 秋香
 街録で政治をつゝく市場籠 梅里
 優勝はもう決つたと席を立ち 淡海
 ラジオ今優勝候補負けた声 水堂
 優勝へ母が育てた子の強き 翠露
 優勝はカメラの云うがまゝになり 南風郎
 どよめきの中に日の丸三つ掲げ 太路
 ひき受けて来た世話役を妻にさせ 梅里
 世話役はしなはんな言われてい 豆秋
 しほらしくあやめ咲くは唄で 白柳子
 団体の一服場所となるあやめ 恒明
 衣替りつかり鍵を忘れて来 武助
 たまさかに早く帰れば鍵かゝり 太路

靴べらに鍵をつないで独り身の徳三
鍵一つ買ひ足した連休日幽王

川 堺支部句会 (堺市)

六月十九日 於 摩天郎居
八木摩天郎報

放射能大丈夫よと買う鯛雄声
医書にさえまだ見当らぬ放射能 摩天郎
放射能うがいの水もまゝならず 英二
夕焼へ一人残されたのは白痴 春翠
代表としての祝辞を読み違え 貴山
妻一人子一人屋飯流し込み 同
屋飯へ軽いリズムが聞えて来 南風郎
真新のタオルは庄えるように拭き 春翠

川 池田支部句会 (大阪府)

二月十四日 於 阪急本社四階会議室
黒川紫香報

ナイターの明るい内に寿司を食べ いさむ
ナイターの灯へレボが迷つて出 彌平
妻と行くナイター彌次は飛ばされず ゆずる
ナイターが溶めばこんな深い夜 凡九郎
ナイターのスタンド西陽が残り 一夜
面白く金魚が動く雨上り 紫香
金魚屋はコレカ〜と追いかける 南風郎
生ビール金魚も涼しい泡を吐き 鮎美
倅せに倅せに金魚の色動く 水客
鬼門など言うておれない繁華街 圭三
中年の迷い鬼門を見て貰い 杏花
庭師ふと鬼門にあたる花を賞め 潮花
内風呂は鬼門をまた位置に据え 水堂
外遊した噂帰つたのも噂 一の宇
煙だけ残る火事場の握り飯 紫香
へつちらら〜に彼女に見放され 雄声

川 鳥取支部句会 (鳥取市)

六月十五日 於 いすゞ販売所
大西八歩報

代表の答辞を家で練習し 遊星
僕だけが正しい議員ばかり居る 法泉子
極楽へやる代議士が見当らず 日満
常連が今夜も揃う屋台店 隼人
屋台店串と手で食う料理出し 喬水
屋台店夢は座敷のある構え 晩稻子
洗濯の手で電気代払わされ 天保銭
里帰り延びて洗濯たまつてい たかし
梅雨の空妻は晴れ間を見て洗い 秀和
洗濯屋うちにも欲しい柄が来る 法泉子
屋上に派手に干されて好い天気 耕民
マニキュアも今日洗濯の日曜日 祖粒
裁判所有る時払にせよと云う 三歩
裁判は星が流れたことも聞き 日満

川 京都支部句会 (京都市)

於 仲源寺
大鶴喜由報

招待券初めてレビニー見る五十 鳥雀
招待券おじぎを一つそえて入り 長次郎
招待を受けぬお人がまた来る 親生
招待へ母の羽織が少し派手 輝雄
招待の客へ系図を見てもらい よしろ
招待席代理が一人座つて居 甫三
招待の皿の白さを前に置く あきら
寝不足な母ホツとする体温器 豊次
寝不足の背にしたかへのひいかさ 晴芽
寝不足の顔にのびてるトロコ、コブ 清江
若き日のロマンスもなく黴見入る 絵丘

川 備前支部句会 (岡山県)

五月十五日 於 吉永町公会堂
浜田久米雄報

儉約がはつきり黴になつて見え ちか子
黴ふかしたしなむ酒も悔の色 司郎
四十の黴に異議あり薄化粧 蘇海
風船がすぼみ役目のすんだ黴 龍一
雨の漏る借傘斜に軒伝い 光二郎
胸算に痛む雨漏りととはなりぬ ちか子
屋根瓦この土砂降りにたえられず 九角
天井のしみ此のうも雨漏つてるを 義行
雨の洩る中に電燈まだつかず 紫蘭
雨洩りを祝言までにと母気にし 古竹
花火見たゆうべの屋根のへまが洩り 紫蘭

発展は戸数がふえただけの事 不二雄
発展へ百姓なんかして居れず 柳風子
発展を氏神様も喜ばれ 東岸子
大吉へどん底の身をふと忘れ 浄美
お化粧の真似をする子が鼻をたれ 喜楽
お化粧がはげた女の生あくび やす子
お化粧も忘れて卒業だけはさせ みや子
父ちゃんも時どきつける化粧水 節人
合併で財布の紐を一つにし 券々坊
合併の悲劇三里をてくらせる 千声
合併の御蔭たびたびのめる酒 運平子
合併で水争いの根が絶たれ 迷久
合併をしたと故郷から便りが来 八重子
合併で河鹿の名所一つふえ 娛句楽
大吉のみくじは捨てず持つてあり 義男
大吉と出でもう一度手を合せ 八千代
倦怠期靴みがかれず磨かれず 久米雄
表彰にまで定員があると知り 甘井子

川 弓削支部句会 (岡山県)

七月十日 於 頼信商店
浜野奇童報

倦怠期ぶらりと旅に出ても見る 一虎
あの山の向うも同じ町になり 駄流尼
表彰も以下同文でもの足らず 正州

チンピラが妻んで見せるサングラス 風船
サングラス男に燃える眸をつゝみ 弓削平
サングラスたゞ砂浜を歩くだけ 同
顔を訪えば跣足で水を汲み 牛歩
双方を呼んで顔役大あくら 巷雨
顔役も女にこびる腫にvari 耕雲
顔役の顔をつぶして娘の家出 七面山
家族連れで来た手伝を邪魔かられ 紫舟
ボーナスが家族連れ出す日曜日 皿水
満員電車また残された家族連れ 信玄
先頭を末の子が行く家族連れ 笑年
家族連れカメラのないを淋しがり 鉄児
赤福に子供背負わず家族連れ 流風
家族連れ山の茶店を占領し 奇童
満員を愚痴つて居るも家族連れ 富至
末つ子がバスで呼ぶも家族連れ 風樹
奥さんが一人肥えてる家族連れ 藤史郎
NHKいゝ所でさようなら 柳枝
相形を崩しバイ〜受けて居る 正平
さよならを聞きに待つて馬鹿らしき 里楊
宿題にして先生は茶を濁し 古心
参観日先生批判の中に立ち 久米女
駅弁の声に居眠り起される 笑鬼
駅弁をあてに来たのに売つていす 至孝
居眠りをして駅弁を買ひ損ね 三平
乗り遅れ駅弁買うて次を待ち 文郎
下車駅は真近駅弁喰い残し 笑泉

✓ 駅弁を買ふなと母の握りめし 貞子
 新婚の妻駅弁を食べ残し 青山
 二等車をきけて駅弁声がかれ 野山
 新婚は駅弁膝へ置いたまゝ 游子
 一ト区間乗せて駅弁買うてやり 秋夫
 窓際にいて駅弁を買わされる 騷人
 駅弁へ故郷の名物入れて居り 一貫
 寝過ぎて駅弁でも見送られ 花子
 駅弁の団体客にチとあわて 百郎
 駅弁の母へはお茶を添えてやり 久米女

雑川 玉造支部句会 (大阪府)

五月十九日 清水白柳子報
 万事OK後はお客を待つばかり 清子
 訪れに衣紋直せばアル 白イト 朝路
 ハイキングも濡れた俄か雨 透水
 止められた煙草見舞がうまく爽み たもつ
 常客は勝手に座布団出して敷き 一栄
 御飯時御免の声に舌を打ち 操
 只飲みの客とは知らず頭下げ 健司
 斗病にさわる長居の見舞客 真沙魚
 客布団先に子供は座をしめる 一正
 客去ぬを待ちかまへたり盆の菓子 璋子
 客長居子の夕食をおくらせる 順甫
 新聞のあざりと読む朝の客 日出夫
 重役の奥さんと会う気の疲れ 都詩子
 ボケットの隅のマッチでやっこ喫い 雅美
 正客も末座も同じ紋所 白柳子
 一匹の鼠家族を引きまわし 暉子
 おしほりを応揚に採るよい育ち 雅美
 鼠もう親念の眼を閉おている 小松園
 夢もまた時には心たのしませ 草白
 夢だけは捨てずの日は追われても 白柳子
 事故あつたトントルに入る不安顔 羊一
 草花にそえ木手報を聞いてから 一栄
 病上り垢を落した身の軽さ 透水

又眼鏡紐付けとけと言われたり 草白
 雑川 倉敷支部句会 (倉敷市)
 七月十一日 於 美よし旅館 田垣方大報

倦怠期思いの趣味を持ち 夢刀
 愛のない夫婦と見えぬ派手暮し 谷水
 御夫婦が恋人だるか前を行く 明心
 押売へ二人出て来る若夫婦 加志子
 アドルもやほり夫婦にして呉れず やよい
 肩ひろろ夫婦なか／＼むつじい 実穂
 留守番を子にさせたらし夫婦連 世子
 女房と俺と煮しめの好き嫌い 星光
 買い急ぎせねばよかつたらが来 聴牌
 話好き急ぐと言うて又坐り 一善
 大よりに育つて急ぐ事知り 千代春
 玄関へ桂馬に飛んだ下駄が反り 鯉風
 市内阪インクの匂い添えて来る 天風
 狸寝に怒つて聞かす金詰り 吞長
 怒るのは妻に委した気の弱さ 不明
 怒るのと聞いた悪口告げに来る 千種
 善人の怒は無口になつただけ 方大
 いや／＼振り切つた娘の瞳が怒る 斜木
 お茶漬の味妻の味旅帰りが 秀魁
 切り出せぬ無心しきりに茶をすすり 一哲
 お茶だけを飲んで帰つた父兄会 草人
 彼女みだりにお茶席へかしまり 素身郎
 伝説を尋ねて行けば石一つ 閑人
 伝説を祖父講談の様に云い 井泉
 伝説が文化の歩み物語り 万古
 伝説も怖しい程よい涼み 白揚
 伝説があつて邪魔する木が切れず 風の子
 伝説へ言葉巧みにパスガール 可笑
 伝説の池も時勢に縮められ 星光
 伝説の話も出たり貰い風呂 楓
 ひばりよりうましく唄うと親しい 馬楽

福田町の内がよかつた税になり 越鳥
 大原を産み大原に育てられ 春日
 倉敷のけしきアチのお気に召し 千容
 美術館あるで倉敷下車をする 加志子
 倉敷で壁と屋根とをほめて去に 万柳
 倉敷の市内で蛙唄い居り 舟水
 倉敷にボッコウ小さな汽車走り 一念
 倉敷の家の古さがロケと呼び 晴路
 無燈火もまだある文化の倉敷市 吉男
 倉敷をして倉敷に海が出来 駄仏

雑川 赤坂支部句会 (岡山県)

七月三日 於 千流居 光好三四詩報

死の灰へ平和論者の血がたぎり 大介
 放射能作つた国は味わず 華富
 特売の鮪が残る放射能 三四詩
 海水賣買うて気になる放射能 冬雨
 放射能たてに魚屋断られ 千流
 海鳴りへ帰らぬ父の身を案じ 佳目夫
 果しない海が愁しい混血児 花蝶
 ニュヨンの夏海もなく山もなし 土生
 豆だこの有る手に握手求められ 玉露
 握りめし母の手の香がまだ残り 馬洗
 巻舌も鮪の握りチと案じ 兼比羅
 物の好き云々顔香具師見のめまぢ 宇柳
 物好きな男女房だけ変えず 芳流
 失恋へ海はせつなきまで着し 一笑
 海へ行つた子丈つけ約ける新学期 飄軒

雑川 八代支部句会 (八代市)

佐野ト占報

集まつた素顔を選ぶ宝塚 ト占
 笑い声だけが聞える涼み台 実信
 涼み台素肌は見せぬ娘の若き 秀敏
 涼み台マツチの軸の駒もあり 芳仙

雑川 大原支部句会 (岡山県)

五月三十日 大原町合併記念句会 本田恵二朗報

当選をしてそれからはそり返り 耕花
 入選の写真焼増代がふえ 青美
 入選へモデルの方が泣いており 雲峯
 迷信と思ひながらも日を選び 耕介
 暗がりを選ぶ浴衣の白すぎる 米花
 外出の柄を選つてる間に曇り 真
 選つた柄娘にあてゝまた迷い 野川
 慶びへ母なればこそ泣いており 喜美女
 慶びへ父母があつたらなと思ひ 一山
 四ツ切へまだ生きてゐる子の勇姿 坊太郎
 四の五のと延し延され夜逃され 十坊
 四苦八苦して投身か這い上り ゆたが
 四ツ玉は苦手でごわさんごらんし 地久平
 会社では四角突宅では丸く 弦児
 七癖の四癖は妻に似て育ち 恵二朗

雑川 下関支部句会 (下関市)

石川侃流洞報

蚊帳越しの闇にも海の色が浮き かつたる
 独身の蚊帳修繕はつまんどき 柳蛙
 金魚売りこゝらで売れる声を出し 藤四郎
 一夏はまあくのがれる破れ蚊帳 一規
 恩給もうけて糸瓜の櫛つくり 阿岐良
 香水もサーピス料に含めてい 良坊
 水かえて金魚一きわ美しい 戊理智
 赤とんぼ出て亡き友をふと想う 詩子
 糸瓜苗年のコースと同じ路 とし女
 病む友へ夏を知らせる金魚持ち 佳久子

金魚掬い末子の手腕に目を躍り 白馬
孝行のおさめ連れた身延山 宇星
マニエンの香水浴びて買わず出る 十字星
長梅雨に小金魚さんさん死んで行き みつる
再軍備論の上でへちまゆれ 蚊竜
へちま棚日覆の役もさせるはら 司樓
夏季手当金魚も病める子に吊し ほなみ
香水に慰められる満員車 土筆坊
ガベラの赤が姑氣にいらざ 木陽子
追越してヘリオトロープだけ残し 妻楊子
世をすれてへちまの如く生きんかな 古都坊
今日からは我が家と思ふ金魚鉢 まなぶ
糸瓜棚氷の旗がひら／＼と 蓮月
大丸へ金魚一匹買いにゆき 十糸女
賞められて太い糸瓜を呉れてや 北斗
蚊帳の内別の世界となつてゆき 誓郎
行水の背筋を撫でる大糸瓜 古子郎
君だけに話す事だと三人目 風子
寝あがきの子へおきかえか蚊帳 蘇人
賑やかにうちわ太鼓が路地を抜け 柳慶
嫁にやる先も法華で馬が合い 九呂平
たしなみと云う香水へ意見され 侃流洞

雑川 宇部支部句会 (宇部市)

国弘半休報

理解ある母に許され父帰る 半休
金種も見分けつかない海水窟 青水
父に似た酒量を母が又案じ 井蛙
子の希望何でも聞いて父は酔い 同
可愛さを肩馬にして父散歩 峯松
給料日父は酒代引いて出し 万盛
放射能気にして泳ぎを覚えとり 凡平
新世帯みどりの丘へ居をかまえ 呆鴨
徳利ふる父はあきらめ切れぬ顔 雪達磨
海の幸港の朝は活気付き 雪峰
若人に海が魅力のストリップ 千里

次々と緑敷いてく田植歌 風柳
海水着今日一日の陽にやける 川鯉

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

七月十日 於 公均の間 野村味平報

坊ちゃんを叱つて見たいさ女中言ひ 魯木
押売りに女中言葉の荒い事 久雄
山からの女中よく食いよく眠り 素百々
奥様が来て台所のおわてよう 芳子
新興の家女中入用と書いてあり 武富
御帰館へ女中さんばの下駄で出る 芳子
付け落ちが手帖にあつてあてさせ とよ
急用は手帖ちぎつて渡される 酔羊
見られては悪い手帖を父拾ひ 光郎
ソツと見る手帖は社用ばかりなり 桃園

雑川 貴生川支部句会 (滋賀県)

五月一日 於 夢生居 黄瀬美秋報

祝電に母の名前も読み出され 柳月
祝電の読む手をてらすシャンデリア 斗志
アメリカにて云う祝電も二三通 凡骨
滞納も忘れて飲んだ祭酒 文福
明日はどこかの祭か旅役者 研玉
小遣を使い果した子の祭り 文子
祭だいこ遠くに聞いて酔いっふれ 美秋
宿直のタバコもきれて寒うねる 夢生
独身の宿直うどんですましとき 迷羊
栄転に社長が送る乗用車 溪流
チャンバラのロケ盛んなり松並木 木人

雑川 浜寺病院支部句会 (大阪府)

六月十七日 膳所新三報

恋のない散歩やたらに石をけり 文糖
彼女来て試歩退院の夢つきず 漫多朗

女房に内緒で当がある散歩 溪泉
たまさかの散歩は妻の用も兼ね 喜多八
新道の散歩は砂利に踊らされ 樺村
土佐犬の散歩は人をひきつれて 大入道
散歩道クイズが解けて引返し 句浪人
苦勞性一匹の蚊に熱を出し 歌扇
検温で内緒の試歩を見破られ 雅方
新婚は散歩に出るも鍵がいり 鬼醉
散歩するならと手紙をことづかり 紫草
子の居ない夫婦散歩へ犬をつれ AT公
へぼ将棋負けて蚊の跡身にこたえ 利坊

雑川 篠山支部句会 (兵庫県)

七月十日 小西無鬼報

末ツ子の産衣は金で贈られる 大葉
産衣縫うそばで子供の名を選び 文子
ウインドの産衣は万を越えて 左文字
ななつきで生れ産衣が間にあらず 無鬼
小粒の外遊連名であしらわれ ひか平
ゴールインするにはし家がなく 基男
カメラ陣に一寸でれてるゴールイン 汲流
一ト廻り遅れたゴール拍手鳴り 無聖
ゴールイン町内よつて抱え込み 菁花
ゴールインしたが違反でも起り 旬士
外遊に女優の人氣バットたち 小菊

篠山 婦人句会 (兵庫県)

小西無鬼報

大臣になるかも知れぬ児の産衣 ふじ子
五人目は産衣も姉の下りもの まさ子
外遊の土産なかなか骨が折れ きくゑ
南部やれくの声援へゴールイン ふさゑ
ゴールイン次々子等の百面相 とし子
ゴールイン後は抱えて歩かされ ふじ子

南海電鉄川柳会 (大阪市)

於 親和寮 友淵貴山報

吐息する訳はうす／＼母も知り 摩天郎
空港を狭しと女優出迎える 圭水
表より裏が嬉しい港の灯 無尽
三万屯の横で小舟のお茶が沸き 香林
警笛に車掌も一寸首を出し 南風郎
警笛が生きよ生きよとさ／＼やいた 凡九郎
警笛を鳴らしカーブも面白し 貴山
警笛の連続乗客窓をあけ 武助
警笛のひびき深夜をつらぬけり 一の子
二人連れ乗せて警笛やけに押し 進歩
警笛に驚き母にしがみつく 雄峯
警笛は僕を叱つている如し 摩天郎
警笛は犬でも饜かぬ心がけ 雄声
警笛に母洗濯の手をはなし 路郎

川柳白鷺句会 (大阪市)

櫻南夏六報

尾を振つて恋の人魚のさようなら 二桂
ぜんざいで男同志の別れよう 嗣骨
なまじつか少なき愛のあわれまよ 一草
午後三時我マンネリズムを愛す 夏六
妻若く故郷の山を恋しがり 紫郎

季節一品料理 江戸前にぎりすし アベノ橋地下映画食通街

梅里の店

大萬

★大万川柳(第四十三回)を募る 兼題 「貯金」 路郎先生選

締切・九月十五日 句数五句以内 発表・九月二十一日(店内掲示)

投稿は 阿倍野区松崎町三丁目 一〇 大万川柳会宛

中の島流れが何かを囁いた みどり
朱と緑白き壁白き女を淋しませ 一子
人魚ふと人魚であるを悲しむ眸 おさむ
夕涼みテレビも一寸みて帰り 和夫
蝶タイでよりく趣味の茶を捨てず 吟月
戦は終われり蜘蛛は巢を直す 山風楼

みをつくし川柳句会(大阪市)

六月八日 於 天王寺中学校

戸田古方報

✔ 辻つまが終いに合わせぬ長談議 球児
思ひ出したように用事を云うて去に のぼる
結論を出して上げたい話しよう 翠露
プラスにもならぬ内職して疲れ 義広
プラスにはならぬらんらばかり飼い 梨花
人目程プラスにならぬ子の勤め 光二
合樋のうまい男に借りられる 雄声
合樋を打つたあげくに袖にされ 正斗

飛 燕 往 來

福田山雨楼氏(横浜市)より

一路 即 宛

啓 八月号四日の午後便で拜受致しま
した。この月は特集号であらうと今日か
今日かと毎日首を長くして待ちました。
雑誌を手にする和一心不乱に耽読、暑さ
も忘るる思いでした。夏の読物だけに肩
のこるものはありませんでしたが頁を開
けばどこからでも読める気易さ、軽快さ
が全巻にあふれていました。編集上の無
技巧の技巧とでも申すべきでしょうか。
(中略) 小生このところ暑さにあえぎな

南区 杏林川柳会(大阪市)

六月十五日 於 生々庵居

長谷川迷路報

✔ 諦めた等と失物まだ捜し 比呂史
金にだけ未練あり気な口をきき 大希志
まだ未練あるか盃なめてゐる 瑠枝郎
未練などない管次が出来てゐる 阿茶
未練ではないが其後の様子きき 一伸
一寸でも未練があるかさきさきり来 阿茶
彼の人の元の素性が物を云い 鳥耕
氏素性云うて通らぬ世となりぬ 迷路
これ以上私の素性聞かないで 瑞川

がらも稍小康を得ております。早く新秋
を迎えたらと毎日炎天をにらんでおりま
す。やつと横臥のままベンがとれるよう
になりましたからこの二十迄には原稿を
書かしていただきたいと大いに構想を練
つております。まだ仲々死ねそうにあり
ません。胃腸に悪いと云うパスを連続服
用していますが平気でたべ物は何をたべ
てもおいしいことです。(二九・八・五)

前田伍健氏(松山市)より

一社 宛

堂々327号、川雑八月号拜受御礼申
上ます。それにしても、先生の御健康を
乍憂心配して居ります。どうぞ御自愛の
上に、御自愛祈上ます。コチラ、各地の

争えぬ素性が二号の子にもあり 生々庵
子の罪で親の素性も洗われる 一哲
素性など気にもとめず二号にし 阿茶
口ごたえ予期してすじ風呂に入り 瑞川
口ごたえしたと課長はかゝるを立て 瑠枝郎
ことごとくに口ごたえする仲のよき 一伸
口ごたえせずだんまりで対抗し 比呂史
口ごたえせず育つた一昔 阿茶
口ごたえせぬ花嫁であきたらずとし代
顔色を見るより口答して欲しい 生々庵
口答え結局二三本はつけ 路郎

明和川柳青蛙句会(西宮市)

六月六日 山本九里三報

胸騒ぐ上に静かに聴診器 夕鈴
国会えあてゝみてくれ聴診器 紫雲
試歩の庭ブルス変らず微笑出で 身素治
語り合う二人の心お茶が知り 千竜

夏季文化講座で奔走して居ります。八月
八日は「たぬき」祭もやります(八・六)

鳥井川鳥氏(愛媛県)より

一路 即 宛

この通信は小畑で書いた阿波節の人の形に似てく
つけてあります(編集局)

特 使

お懐かしい路郎先生、一足先きにお迎
えに参りました。承りますれば日頃憧れ
のお慕わしい川雑傘下の皆様と共にわた
くし達の「おどり」を御覧下さる為、近
々海路はるく四国の地迄お越し下さる
との朗報、老いも若きも張り切つてその
日を楽しみお待ち申上て居ります。酷暑
の折柄お身体にお気をつけられてお越し
下さりませ。(六月六日)

お茶の会馴れぬ作法にかしこまり 玲三
病良し注射器も信じられ 進
聴診器持つて主治医が老けて見え 春洋
パチンコの楽しさ知らず寝て暮し 溪月
パチンコはあるが電気のかね村 一水
注射器はカタリコトヨリで来る 貴美
パチンコの最後の玉に運をのせ 鶏声
聴診器恋の心も見て欲しい 水里
そわ／＼と今日のブランに籠をそり 酔歩
お見合のはずむ心でお茶を出し かをる
パチンコに課長もまぢる午さがり 桔梗
ひげそりへる来たり友の口笛 五月坊
温いパンだつたらし血の露 成詩
パンくずに蟻長々とせわしげに 九里三
パチンコの裏と表へ通う恋 白馬
ニコソンの汗ににじんだパンの味 至不也
夢で見た注射も矢張り痛かつた 静峯
聴診器ゆつくり置いてからのうそ 善坊
微笑する友の背広の肩が落ち 牧人

阿波踊り娘子群代表
十郎兵衛長女つる子

路郎先生

八木摩太郎氏(堺市)より

一路 即 宛

謹啓 大切な川柳まつり胃痛で欠席不
悪御許下さい。編集も気に掛りながら御
伺いも出来ず是亦御寛恕の程を、大分ま
しになりましたが外出差控で居ります。
十八日午後労働会館で堺吟詩会発会式を
兼ね吟詩大会を開催河盛、南、山口の三
市長、大塚市長夫妻、教育委員長、植村
府会議員其他本部より福島区の宮崎医
博、八木哲洲宗師、滝京阪神支部吟士百
名、私は会長で開催、身体が案じられます
(以下略) 七・一四



私記

★本年はどちらかと云うと氷屋泣かせの冷夏が長くつづいて、本格的な夏の時間がすくなく一寸酷暑になやまされたと思つたら、すぐに涼風が立つた。いよ／＼句の秋だ。★本号は原稿がフクソウしたので富士野鞍馬氏の「一の谷」其他が次号へ割愛された御寛恕を乞う。★前号は梨里が、疲労の極限を病んで眼帯の隻眼繻繻長となつたため柳務が遅滞、加うるに、一

日が日曜だったので八月号が二日に出来上つた始末、決して怠けた訳ではない。ここ数年間、前月のうちに刊行を續けて来た歴史が破れたことを苦痛としてゐる。御寛恕が願ひたい。★阿波踊見物と鳴門観潮の吟行は予想以上にゆかいだったので一行廿五名大満足のていである。何れ次号にその片鱗を掲載して不参の方々に御分けをしたいと思つている★九月十九日午前十時から岡山県久米郡久米南町(弓削町)で別掲の如く第六回西日本川柳大会が催されるので、私もその前日から出かけることになつてゐる。久しぶりに多くの柳人に顔が合せると思ひ今から楽しみにしてゐる。(路)

不朽洞

会から

▼戸倉普天氏(兵庫県)は七月下旬篠山町の小西無鬼氏を訪問された由▼木村千容氏(倉敷市)は山陽新聞記者文芸「夏更」の第一席に入賞された二回目の第一席で氏の手堅い句振りが察せられる▼福田丁路氏(大阪市)は琴平の会議を終え八月四日夜高知市着、市内外の観光五日帰阪の由▼延永忠美氏(岡山市)は山陽新聞本社宅が漸く竣工八月六日に入居式までこぎつけ、本社新館増築の方も

話を福島鉄児氏に依頼することになつた由▼中島生々庵医博(大阪市)は夫人令息同伴、本社催しの阿波踊見物と鳴門観潮吟行に参加された。なお路郎主幹をはじめ不朽洞会員では牟田一哲夫妻、河村瑞川夫妻、長谷川迷路の諸医博、橋本緑雨氏、松江梅里氏、後藤梅志氏等一行廿五名大はしやぎであつた▼丸尾潮花氏(大阪市)は七月下旬急性肺炎で目下自宅で安静されている一日も早く快癒を祈る▼阪田良坊医博(下関市)は七月初旬に京都の令嬢令孫が病臥されたので夫妻携えて急遽上洛されたが、その後快癒されたのことおよろこび申上げる、なお七月には九州鉄道医学会が熊本人吉であり出張された由▼西浜聖氏(路郎師愛婿)が七月下旬和歌山市古屋四三六住友病院第三病棟十八号へ入院された▼福島鉄児氏(岡山県)は八月十六日に不朽洞へ来訪され今秋開催の西日本川柳大会の事、川維弓削支部の発展状況其他弓削名物川柳せんべいのことなど詳細報告の上夕刻帰岡された▼杉谷湖山氏(鳥取市)は鳥取県観光聯盟主催青空教室に参加し隠岐島探訪に向かわれ「魚よしドツサリ節に夜を更かし」の句を寄せられた▼田垣方大氏は倉敷市水島寿町三丁目三番地へ移転された▼塩浜一路氏は家事の都合上七月末限退会された▼藤岡至芸瑠氏は家事の都合により

残暑御伺

中島生々庵

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

福田妄夢

大阪市西成区北吉田町二〇番地

ひまわり社

石田 沐天

三條東洋樹著

『川柳への道』(新装版) 定価三〇〇円(送料別)

川柳を始めたいと思ふ人、早く上手に成りたいと思ふ人、贈る著者の奉仕的出版。是非御一讀御利用を。

神戸市兵庫区神田町七九
發行所 白鳥川柳会

川柳雑誌社特製

投句用 柳箋

一冊(五十枚綴)三〇円
送料八円

募集

課題吟募集

雷 (廿句) 麻生 葎乃選
待合室 (廿句) 石川侃流洞選
商人 (廿句) 西尾 栞選
舌 (廿句) 新川 博也選
(九月二十日締切)

每号募集

近作柳樽(雑詠廿句) 麻生路郎選
川柳塔(雜詠) 北川春巢選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▲投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▲『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は何人でも投句が出る。
▲『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 第九巻

定価 四〇〇円 (送料別)

半ヶ年 二六四円
一ヶ年 五二八円

昭和廿九年八月廿五日印刷
昭和廿九年九月一日発行
大阪府住吉区南内代四丁五丁目五番地
編輯兼發行所 麻生幸二郎

發行所 川柳雑誌社
大阪府住吉区南内代四丁五丁目五番地
電話口番 大阪七五〇五〇

Printed in Japan

THE SENRYU ZASSHI

NO. 328

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

胃潰瘍

胃痛・胃酸過多
十二指腸潰瘍
予防・治療

ファナリン

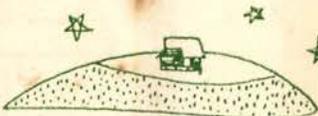
潰瘍を促進させる胃液酸度を低下させ、同種剤中副作用がいちばん少く、価格も低廉な新原因療法剤です。予防にもよい。



大阪名菓
もろかんのあじ
源氏に最や

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話 三四〇九

山通山



☆ ☆ ☆

宿泊料150円 (毛布・炊事料)

別棟個室 1室 500円

☆ 食堂・談話室・売店
男女別浴場完備

三日市駅下車なんばより580円

南海電車

山の家